それぞれの空へ

邪餽 珀磨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
それぞれの空へ

【Ｎコード】
Ｎ６５７２Ｂ

【作者名】
邪餽　珀磨

【あらすじ】
ある村で独り、ひっそりと暮らしていた少女・ミーナ。彼女の運命は、人との出会いで大きく変わる。これは、そんなミーナ達の物語。

ＳＴＯＲＹ１：始まり

とある村に、両親を亡くし、つい最近まで一緒に暮らしていた祖母も亡くした少女がいた。
その村には、少女が独りで住んでいた。
村長でもあった父親が、馬車に引かれて死んでからというもの、人々は村から去って行ってしまったのである。
少女の名前は、ミーナ・ドラグルゥ。
瞳は碧（あお）、髪は茶色。ショートカットの活発な少女である。
ミーナは今日も、食料を集めるために森へと足を運ぶ。手に父親の形見である、蝶の紋章が彫ってある剣を持って。　いやいや、決して危なくはない。
少女・・・と言っても、彼女はもう１８歳だ。それに、森には野獣も魔獣もいるのだ。
最低限の武器を持っていないと、逆に危ないのである。
この世界には、幾つもの生き物が存在する。
大きく分けて、人間・野獣・魔獣・魔族・キメラの５種類に分けられる。
以前は、竜（ドラゴン）という生き物もいたようだが・・・。
魔族との争いに巻き込まれたらしく、それ以来竜を見た者はいない。　その昔、魔族の王とも言える存在が世界を支配していた。
その存在を倒した者達が、現在の世界にする駆け引きをしたのである。
その者達の子孫は数多く、一番濃い血を授かった者にはそれぞれに『紋章』と呼ばれる痣が身体の何処かにある。
昔は腐る程いたのだが、１００年も経っているからかその数は少なくなってきている。
ミーナの父親がそうだった。

そして、昔、村に住んでいたミーナの親友もその1人だ。
今はいないが・・・。
「・・・変ねぇ・・・」
獲物を探していたミーナがそう呟いた。
「なんで、何も出て来ないの・・・？」
何時もなら、獲物となる野獣や魔獣を3～4匹は仕留めているはずなのだが・・・。
まだ、何も出て来てない。
ミーナは胸騒ぎを感じたが、暫く森を探索することにした。
この森に、何かあるのかもしれない。
そう思った。
ミーナは、その辺に生えている木の実を集めつつ、森の奥へと足を運んだ。

ガサガサガサッ！！！
「誰っ！？」
『・・・その声。ミーナ！？ミーナでしょ！？』
ミーナが、音のする茂みを見つめると聴き憶えのある声が聴こえた。
しかも、その声の主はミーナのことを知っているらしい。
その声の様子からして、相当仲が良かったようだ。
「誰なの？姿を見せなさい！」
ミーナは、用心して言った。
この森に住む魔獣の中には、人間の声を真似して注意を引くものもいるからだ。
茂みの向こうの声は、仕方無さげに文句を言いながら出て来た。
が、目の前に・・・ではない。
足下に・・・である。
真っ白な猫が、ミーナの足下に現れた。
魔獣でも、野獣でも無い。ただの猫。
額の星を現した痣が目に付く。

「・・・・・・サミー？」
ミーナは、昔この村に住んでいた親友の名前を口にした。
いやいやいやいや・・・。あり得ない、あり得ない・・・。
何故って？
何故って、そりゃ～親友のサミーは人間だからだ。
ミーナも首を振って、自分に言い聞かせた。
だが・・・。
「や！久しぶり！！」
その猫は、喋った。
まるで、人間のように・・・。
しかも、器用なことに二足立ちになっているではないか。
「・・・・・・・・・・」
ミーナは黙ってしまった。
サミーらしき猫は、ミーナの足をペシペシと軽く叩く。
「アレ？お～い、ミーナ～？起きてる～？」
ミーナは、はっとしてその猫を持ち上げた。
そして、投げた。
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
「スターアロー！！」
「きゃあ！！」
化け猫（サミーらしき猫）を投げた方向から、白く輝く矢がミーナを襲った。
化け猫は、怒った様子で再びミーナの足下に現れた。
「イッタイじゃん！！何すんのよ！ミーナ！！」
「い、今の技・・・サミーの・・・？」
ミーナは、目を丸くした。
動物が、呪文を使える訳がない・・・。
ようやく、目の前の化け猫をサミーと認識した。

「だから～、さっきからそう言ってるじゃん！」
サミーは話を続ける。
「ま、今はこんな姿だけどさ・・・」
と、涙ぐんで言った。
「ご、ゴメン・・・」
ミーナは申し訳無さげに誤った。
ここで紹介しておこう。
彼女の名前は、サミー・スティアーズ。
ミーナの住む村に住んでいた１８歳の少女である。
今は白い猫の姿をしているが、人間の姿をしている時には綺麗な琥珀色の瞳に薄蒼い髪をしている。
彼女の職業は、薬剤師。
病気がちなミーナの祖母を治すための薬を探しに、村を１６歳の時に出て行っていたのである。
そして、彼女には額に紋章がある。
『星』を現した紋章だ。
紋章を持つ者は、その型（かたち）に合わせた呪文を唱えることが出来る。
先程の《スターアロー》もその一つだ。

森の中では何かと不便だということで、２人はミーナの家へと帰っていた。
「そう・・・」
窓際から見える小さな墓を見つめて、サミーは悲しそうに呟いた。
その墓は、ルリコンと呼ばれるここら辺でよく採れる宝石で出来ていた。
ミーナの祖母の墓である。
サミーは、悔しそうだった。
何のために村を出たのかと、自分を責めていた。
「間に合わなかったんだ・・・・」
「サミーは悪くない。ばあちゃんもそう思ってる・・・」

ミーナはそう言って慰めた。
暫く、そんな時間が過ぎた。
悲し気な空気を、見事にぶち壊した言葉をかけたのはミーナだった。
「で？なんで猫な訳？」
サミーは無言だ。
ミーナは再び聞いた。
「・・・薬を飲んだの」
「・・・・・・・・・・は？」
サミーの一言に、ミーナは思わず呆れた声を出した。
サミーは話した。
如何にもアヤシイ黒フードの男からもらった、如何にもアヤシイ薬を買って飲んだら・・・・・・・・・。
「こうなってた・・・」
ミーナは”それは・・・”と考える。
暫く考えて、答えが出た。
「サミーが悪い」
「なんでよ！？さっきは悪くないって言ったじゃん！！」
「それと、これとは違うでしょ！！（怒）」
「ミーナの分からず屋ぁ！スターア」
チュドォォォォン！！
「「へ？」」
凄まじい音と共に、ミーナの家の屋根が吹っ飛んだ。
ミーナは、素早くサミーを睨む。
サミーは、自分ではない、と首を振った。
確かにサミーではない。呪文を唱える途中だった彼女には不可能だ。
それに、屋根は上に飛ぶのではなく削ぎ取られたように飛んだのだ。
つまり・・・外から。

「出てきやがれ！指名手配犯！！」
「この村に逃げたのは失敗だったな！いい加減、姿を見せな！サンドラゴ！！」
無くなった屋根を通って、２人の男の声がした。
サミーの顔が青冷める。
《サンドラゴ》という名に聴き憶えがあったからだ。
「や、やばいよミーナ！」
サミーは小声でミーナに訴えた。

ずぅっとこの村で暮らしていたミーナには、何のことだかよく分からない。
「何？誰なの、そいつ」
「しーーーーーっ！！！」
「ちょっ・・・な、何す・・・」
普通の声で言うミーナに、サミーは飛び付いて口を塞いだ。
少々、ドタバタとしてしまったが・・・。
「「誰かいるのか！？」」
・・・やっぱり、気付かれてしまった。
だが、返事をしたのは彼女ら２人ではなかった。
ニャ～

「なんだ・・・」
「猫か・・・・」
サミーでは無い、別の猫。
どうやら２人の男も諦めたらしく、その場から立ち去る音がした。
ミーナは、サミーをベリッと剥がして息を吐いた。
サミーが窓際からいなくなったのを確認する。
「まったく・・・。修理する所が増えたじゃない」
ミーナは吹き飛んだ屋根を拾いに外へ足を運んだ。
サミーは、ミーナの祖母の墓が無事なのを確認すると安心するよ

うに息を吐く。
そして、そこに座った。
「きゃっ・・・！」
サミーの耳に、遠くからミーナの声が聴こえた。
何かに驚いたような、そんな声だ。
ミーナのことだから大丈夫、なんて思っているサミーだったが渋々足を運ぶ。
「ん～もぉ・・・。どぅし」
サミーは言葉を失った。
剱を持つミーナの目の前に、血まみれで倒れる男の姿。
哀れみな瞳でミーナを見つめる。
「ミーナ・・・ついに犯罪にまで・・・」
「違うって」
ミーナは否定する。
そんなことサミーは聴いちゃいない。
「いいの、あたしはミーナの味方だから！」
「だから、違うって」
サミーは尽く無視する。
「さ、今すぐ自首しよ？」
ゴンッ！！
ミーナは剱の鞘でサミーを打った。
「違うって言ってんでしょ！！」
サミーは頭を押さえる。
痛々しい限りだ・・・。

場所を換えてミーナの家
ミーナは、なんとか信じてもらったサミーと血まみれで倒れていた男を連れて家の中にいた。
ミーナはテーブルに着き、マグカップに注いだコーヒーを飲んでいた。

サミーは、頭に大きなタンコブを作ってテーブルの上に座って平らな皿に注いだミルクを飲んだ。
血まみれの男は、今はミーナの部屋で横になっている。
もうすぐ、日が暮れる。
朱(あけ)に染まり始めた空を見つめて、ミーナはそう思った。
「・・・ミーナ」
何かの音を感じ取ったサミーが小声でミーナを呼んだ。
どうやら、男が起きたらしい。
ミーナは自分の部屋から出て来る男に向かって、おはよう、と声をかけた。
「・・・えっと・・・こ、ここは・・・？」
男は今の事態が上手く捉えることが出来ないらしく、ミーナに聴いた。
「わたしはミーナ。この子はサミー。・・・貴方は？」
目が覚めてまだ間もないというのに、ミーナは淡々と男に問いかけた。
男は黙っている。
考えているのだ。何故、自分がここにいるのかを・・・。
「ねぇ。貴方の名前は？何？」
「あ、俺は・・・リュウ」
ようやく理解出来たのか、リュウと名乗る男は呟くように答えた。
歳はあまり変わらないくらいに見える。
炎のように紅い髪と、蒼い瞳が強い印象を持たせる。
額にオレンジ色のハチマキをして、ワイルド系の姿だ。
「でぇ・・・、俺はなんでここに？」
「わたしの家の屋根が貴方の頭に直撃したの。一応、人殺しにはなりたくないからここまで運んだのよ。ここは、わたしの家。そして、わたしの村よ。・・・・さて、ここまでで何か質問は？」
「《一応》てのが気になるけど・・・・あ、いえ・・・なんでも無いです」

リュウはそう言った。
ミーナは、そう?、と気取って言うとリュウにある葉っぱを渡した。
見た感じ、毒毒しいオーラを放ってそうな色をした、しなびた葉っぱ。
「それ、よく噛んで汁だけ飲んでね」
リュウは言われた通りにその葉っぱを口に入れ・・・。
「苦!」
一度口に入れたその葉っぱを、ぺっ、と床に吐き出した。
その瞬間、リュウが真後ろに吹き飛ぶ。
サミーの飛び蹴りがクリーンヒットしたのだ。
「勿体無いことすんなぁ!!」
「ってぇ!何すんだ!この馬鹿猫!!!」
折角自分が用意してやった、よく効く薬草をタダであげたというのに・・・。
サミーは憎しみを込めて言った。
そして、口喧嘩が始まる。ミーナにとって、暇な時間だけが過ぎて行く。
リュウはキレてしまって、猫が喋っていることに気付いてないようだ。
そろそろ太陽も沈みかけて、辺りが静かになってきた。
どんだけ喧嘩してんだか・・・。
2人も、言うことが無くなったらしく息を切らして睨み合った。
「五月蝿い。リ・・・ナントカさん、それ飲まないと大量出血で死んじゃうわよ」
「リュウだ!・・・・あ?死ぬ・・・・・?」
リュウはミーナの言葉を信じた。
何故なら、リュウ自身の足下は己の血の海と化していたからである。
「だから言ったじゃん!ほら、さっさと噛んで汁を飲む!!」

自分の血の海を見て落ち着いたのか、リュウはサミーを指刺した。
ちゃんと、葉っぱを口に入れながら。
「猫が喋ってる！？」
「「遅っっ！！」」
リュウの顔色はだんだんとよくなっていく。
それもこれも、サミーが近くから見つけて来た止血草のお陰である。
だが、リュウの顔は青冷めていく。
それもこれも、サミーが口を聴いてしまったからである。
頼りになるんだか、ならないんだか・・・。
「とにかく！今は静かにしてて。この辺りに指名手配犯がいるらしいから」
なんとか話を切り替えようと、ミーナが例の男達の話を持ち出した。
それに反応して、サミーの顔が変わる。
『恐怖』という顔に・・・。
「そうだった！《獄炎のサンドラゴ》がいるんだった」
「指名手配？何の話だ？」
リュウはキョトンとして、サミーに聴いた。
指名手配犯を知らないのか、《指名手配》という言葉事態を知らないのか・・・。
「知らないの？嘘でしょ！？田舎者のミーナならまだしも、あんたみたいなのが知らない訳ないでしょ！！」
「あぁ、勿論知ってる！あの人は何時も俺を助けてくれるからな！！」
顔を青く染めて言うサミーに対して、瞳を輝かせてリュウは言った。
あまりのカルチャーショック（？）に、サミーはうなだれる。
リュウは、指名手配犯のいいところをペラペラと語り始める。
間に挟まれたミーナは、うんざりしていた。

今はまだ知らなかった。
この出会いが
ミーナの運命を覆していたということに・・・。

『いよいよだ・・・。魔族がこの世を支配するのも、残り僅か・・・。ふはははは・・・・！！』
誰も知るはずのない魔族の舘。
しかし、そこには怪しげに笑う者がいる。
その者は怪しげに輝く大きな墓石に向かって、笑みを溢す。
今の段階では、この者が何者なのかは・・・誰にも、分かりはしないのだった。

STORY2：続き（前書き）

インフルエンザで携帯をいじる気力がありませんでした。お待たせしてすみません。　感想・評価　待ってます。

STORY2：続き

リュウの語りはまだ続いていた。
「・・・てな感じで、あの人が指名手配なんて俺は信じない！」
「あっそ」
もう、何も言いたくないミーナは耳をポリポリと掻きながら呟いた。
既に、あれからかなりの時間が経っていた。
サミーなんか、長い話のせいで眠ってしまったではないか・・・。
「・・・でな？」
「もういい。ちょっと黙って」
再び話し始めようとするリュウに対して剣を構え、睨んでミーナは言った。
「ご、ごめんなさい」

ドォォォォン・・・！！！

「「「な、何！？」」」
あまりにも突然のことで、3人にはよく分からなかったが、次の瞬間ミーナの絶叫で分かった。
再び、家の屋根が吹き飛んでいたのである。
考えられるのは、昼頃に屋根を吹き飛ばしたあの2人の男。
ミーナは怒って、剣を持って飛び出した。
「いい加減にしなさいよ！！」
2人の男は、驚いた様子を一瞬だけ見せたがすぐにニタニタと笑う。
”な～んだ、ただの女か・・・”とぐらいにしか思っていないように見える。
その姿に、ミーナはカチンとした。

「この村の女か？」
男の１人、黒い軍服を着た顎髭が目に付く奴がミーナに聴いた。
以後、この男を顎髭と呼ぶ。
「そうよ、だから出てって」
２人の男はケラケラと笑い出す。
何が可笑しいのやら・・・。
顎髭のとなりにいる、同じく黒い軍服を着たモミアゲが目に付く奴がミーナに剱を構えた。
以後、この男をモミアゲと呼ぶ。
顎髭も、剱を抜いた。
「おい女。ここに、指名手配犯・サンドラゴが来てないか？」
顎髭が聴いた。
ミーナは黙って首を振る。
モミアゲがミーナの首に剱を向けて、同じことを聴いた。
「ここは田舎よ？そんな知らせが来る訳無いじゃない」
ミーナは、恐れる訳でも無く、驚く訳でも無く・・・。
ただ、本当のことを当たり前のように答えた。
顎髭が合図を送ると、モミアゲは剱を降ろした。
「そうか・・・。なら、仕方ないな。おい」
顎髭は再びモミアゲに合図を送る。
モミアゲは、背中に装備していた大砲のような拳銃をミーナの家に向けた。
そして・・・・。

バシュッ！バシュッ！バシュッ！！

躊躇い無く、次々と撃って行った。
それにはミーナも驚いた。
まだ中には、サミーとリュウがいるからだ。
モミアゲの砲撃のお陰で、ミーナの家はものの見事に崩れ落ちた。

全てが土に帰った時、顎髭とモミアゲはかん高く笑い出した。
「うっ・・・うわあぁぁぁ！！！」
ミーナは剱を構えて2人に向かった。
長年住んだ家を、沢山の想い出が詰まった自分の家を、綺麗サッパリ無くした2人に向かって。
顎髭とモミアゲは、鼻で笑いながらミーナの動きをかわした。
少し、剱で服を破いてみせる。
その、ニタニタした顔からは下心が見え見えだった。
ミーナは、服をボロボロにされても諦めずに向かった。
ミーナの執拗な攻撃に、モミアゲは苛立っていた。
「しつけぇんだ・・・よ！！」
モミアゲはそう言って、ミーナの腕を斬り付けた。
ミーナは声無く倒れる。
腕からは血が流れ、何時も隠すように着けていたサポーターがズルズルと地面に落ちた。
「「！？」」
サポーターの下に浮き出た、ミーナの腕の痣に2人は驚きの表情を見せた。
ぼんやりと浮き出たミーナの痣を見て・・・。
「お、おい・・・。マジかよ」
「この女・・・。まさか・・・・」
ミーナは、訳も分からずに顎髭とモミアゲの2人を睨んでいた。
彼女にはもう、攻撃する力は残っていない。
何を血迷ったのか、2人はミーナに向かって剱を本気で向けた。
ミーナの顔に、恐怖の色が現れる。
2人は、勝ち誇ったように微笑んだ。
顎髭は、剱先をミーナの頭の上で構えた。
「死ねーーー！！！」
一度振り上げ、そしてその高さから一息に振り降ろした。
・・・が、それは降りきられなかった。

遥か遠くで、空き缶が落ちたような高い音が聴こえた。
ついでに、誰かの笑い声も聴こえた。
「女相手に容赦無ぇなあ・・・おい！！」
逆光のせいでよく見えないが、それはまさしくリュウの声だった。
それを見た2人は、同時に叫んだ。
「「出やがったな！」」
「リュ・・・ウ？」
ミーナは、力無く呟く。
2人は、リュウを・・・知って・・・いる・・・？
「《獄炎》・・・！！」
「リュウ・サンドラゴ！！」
その時、ミーナの頭は真っ白になった。
何を言っているのか・・・分からない。
「キルフレイム・・・」
リュウの両手から、紅い炎が生まれメラメラと燃える。
顎髭とモミアゲは、腰を抜かして座り込んでしまっていた。
リュウは、ニヤリと笑みを溢す。
「帰れ。それとも・・・喰らいたいか？」
リュウの言葉に反応して、2人は逃げ去る。
「帰ったら言っておけ！！勝手に俺様を指名手配にすんなってな！！」
逃げる2人は、それを聴いていたのか・・・聴いていないのか・・・。
よく分からないまま、時間だけは過ぎて行った。

ミーナは、リュウを睨んでいる。
リュウは、思わず目を反らす。
「説明して」
それだけ言った。
リュウは小さい声で、はい・・・、と答えた。

「はいはい、そぉです。俺がサンドラゴです！・・・でも、俺にも理」
ミーナは、リュウの言葉を最後まで聴かずに剱を振った。
首にギリギリの所で止めたが、リュウはビビって言葉が最後まで続かなかった。
「言ってたわよね？”あの人が何時も助けてくれる”・・・って」
あれは嘘だったの、とミーナは聴いた。
リュウは首を振る。
嘘ではないらしい。
「俺を助けてくれるのは俺自身だ。・・・嘘ではないだろ？」
「屁理屈ね」
２人の後ろから声がした。
白猫のサミー（人間だけど）の声。
しかも、冷たく、厳しく言った。
確かに、屁理屈かもしれないけど・・・。
と、リュウは1人と1匹に挟まれて嘆いた。
てか、無事だったのかお前・・・。
「本当のこと言いなさい。じゃないと・・・ミーナ、キレるわよ」
「・・・分かった！分かったからその剱を降ろせ！！」
リュウはもう一度、ミーナ達に自己紹介を始めることにした。
まずは、名前から・・・。
「俺様はリュウ・デューク・サンドラゴ。世界一の大富豪と呼ばれるあのデューク家だ。でも、俺は金持ちの生活が嫌になって飛び出した。どぉせ、家を継ぐのは俺だと決まっているからな。んで、暫く旅してたら何時の間にか《獄炎のサンドラゴ》とかいう指名手配にされて・・・。ま、犯人は分かってんだけどな。連合軍のジジィめ・・・」
「「連合軍！？」」
リュウのあっという間の自己紹介が終わると、ミーナとサミーは声を揃えた。

ミーナは思い出す。あの、見たことのある黒い軍服を・・・。
この世界には、『連合』と呼ばれる軍団が存在する。
それは、魔族と闘った勇者の1人が創立したものだという・・・。
勇者が死を迎えた時、『連合』ではその勇者の名を大佐に昇格した者に授ける、というしきたりが始まった・・・と、言われている。
え？
なんで、そんなに確信が無さそうに言うのかって？
それは、噂だからだ。
『連合』という軍団が存在していることさえ、最近まで噂とされていたくらいだ。
「ちなみに、俺は『竜』の紋章がある」
リュウが話を戻すように言った。
サミーが、リュウのハチマキを取ってみせた。
が、そこに『竜』の紋章の姿は無い。
「そこじゃねぇよ。ここだ、こ～こ！」
そう言って、リュウは上着を上げて割れた腹筋と竜を現した紋章を2人に見せた。
調度、心臓の辺りから右側にずれた所にそれはあった。
ハチマキはただ着けているだけのようだ。
「ねぇ？『竜』の紋章って、何が出来るの？」
ミーナの素朴な質問だ。
サミーの紋章のことしか知らないミーナの、当たり前の質問だった。
サミーが取ったハチマキを結び直しながら、リュウはその質問に答えた。
「火に近い力があるな・・・。紋章には『炎』ってのもあるから、それよりは弱いけどな」
リュウはそう言っていたが、詳しいことは分からないらしい。
ミーナとサミーは、呆れて言葉が出なかった。
そして、口を揃えて言う。

「「ばっかみたい」」
自分のことだというのに、知らないだの分からないだので済ませるリュウが、馬鹿らしく見えたのだ。
そんなリュウは、ただ苦笑していた。少しは自覚があったようだ。
「・・・ミーナ。これからどうするの？」
とりあえず、馬鹿なリュウは放って置いて、サミーは聴いた。
この、目の前にいる馬鹿のせいで壊された村・・・そして、家。
ミーナは、考えに考えて剱をリュウに向け直した。
「わ、ちょっ！タンマ！！」
剱を向けられたリュウは、慌てた様子を見せた。
「責任取りなさい」
剱を手にする者が言った言葉とは思えなかった。
その蒼い瞳から溢れ落ちる涙と共に口から溢れたという感じだったのだ。
後ろの方で、サミーが何やら荷物をまとめ始めている。
大きなリュックだ。
その隣にある小さなリュックのことを考えると、どうやらこの村を離れる気らしい。
「た、旅に出る気か！？」
「文句が言える立場だと思ってんの？」
「いえ、あの・・・ごめんなさい」
グサリと、ミーナの言葉がリュウに突き刺さる。
リュウは、冷や汗を垂らしながら、どうするんだ、とミーナに尋ねる。
「わたし達に協力するの」
「はぁ？」
リュウは、今日一番の大きな目を点にしてそう言ったのだった。

ＳＴＯＲＹ３：旅（前書き）

ちなみに少女・少年～２０未満、青年（女を含む）～２０以上です。

感想・評価待ってます！

STORY3：旅

青い空と白い雲。
そして、燦々と輝く太陽が荒れた道を歩く3人を照らしていた。
小さなリュックを背負った白い猫と、一本の剣を背負った碧い瞳の少女（18歳）、そして大きなリュックを背負わされて泣きながら歩く碧い瞳の少年（19歳）の3人である。
まぁ・・・言わなくても分かるだろう？
簡単に言えば、2（ミーナとサミー）対1（リュウ）だ。　勝てる訳無いじゃない！
リュウごときがあの2人に勝てる訳が無いじゃない！！
「いい天気～。ね？ミーナ」
軽やかなステップと口調でサミーが言う。
ミーナも、自分の瞳と同じ色の空を見つめて頷いてみせた。
リュウは相変わらず泣いている。
そんな3人の目の前に、一つの街が見えて来た。
サミーは、瞳を輝かせて走り出す。
小さいお陰であまり進んではいないが・・・。
「ね、ね！街だよ、街！」
「本当だ～！こんな近くに街があったんだ～！」
泣いているリュウは放って置いて、ミーナとサミーが嬉しそうに言った。
「ん？・・・街？・・・」
泣くのを辞めたリュウが、重い荷物を背負い直しながら2人が言う街の方を覗いた。
確かに、目の前に街がある。
リュウは提案する。
とりあえず、ここらで休もう、と。
「リュウにしてはいいこと言うじゃない」

と、ミーナが言うとサミーも賛成して、目の前の街に行くことが決定した。

３人はまず、呆気に取られた。

街の状態と、人の状態と、今の状態に。　タイミングが悪いと言うか、なんと言うか・・・。

３人の目の前には、『絶望』の二文字が目に見えた状態が広がっていた。

「どうしたんですか？」

ミーナが、目の前で片膝を付けた男に聴いた。　男は、涙目になったままで振り向くと３人を迎え入れた。

「ようこそっ・・・ひぐっ。メルガトの街へ・・・」

話し始めた途端、涙と鼻水が同時に垂れた。

えぇい！鼻水を拭け！鼻水を！！　と思うミーナだったが、敢えて言葉にせずちり紙をそっと差し出した。

その優しさに（偽善だが）感動した街の男は、３人を街に歓迎してくれた。

男も少し落ち着いた様子で、ミーナは再び、どうしたのかを問い出した。

「はい。実は、この街の暴力団には手を焼いてまして・・・」

男は、ミーナに貰ったちり紙を右手にしっかり握って語り始める。

「街の物を壊すことは無いのですが、ただ・・・食べ物や着る物、お金や装飾品を奪い去って行くのです」

話を真剣に聴いていた（フリ）ミーナは、少し考えて質問した。

「何人くらいいるの？」

少なかったら、ブッ倒してしまおうという考えだ。

ミーナが予想しているのは２０～３０人程。　だが、男の口から出た数はミーナの予想を覆した。

「さ、３・・・」

「え？３０人？それだけ？」

こちらには紋章を持つ者が2人もいるのである。　そんな奴ら、わたし達が倒してあげるわよ、と付け足して言うミーナに、男は待ったを掛けた。
「え？違うの？」
「は、はい。その・・・3人・・・なんです」

・　・　・　・　・　・。

男とミーナの間に、完全な『間』が生まれた。
ミーナの目が点になる。
呆れて物も言え無いのだ。
「街の皆で、わっと行けばいいじゃない」
最もなミーナの意見に、男も首を縦に振って相槌を打って答えた。
「したいのは山々なんです。でも・・・その3人は紋章を持つ者達でして・・・」
男は紋章を恐れているらしい。　それは、男だけではなく街の住民全てのようだ。
男は、ミーナに決して近寄らないようにして下さい、と釘を打って言った。
歓迎した旅人に死なれては困るからだと考えられる。
ミーナは、今までの汚れとか疲れを落としたいと思ってもいたために、とりあえず今回はお言葉に甘えることにした。

ちょっとボロい宿で食事を済ませ、十分に休んだミーナ一行は朝早くから街の広場にいた。
とっても
「寒ぃ・・・（泣）」
あ、台詞取られた。
「うっさいな～。だったら、リュウだけ帰ったらいいじゃん」
両手で、両肩を持って小さくなるリュウの隣でサミーが言った。

その冷たい一言に、リュウは更に身を震わせた。
3人がここに来たのには理由がある。　簡単に言えば、街の人への恩返しだ。
街に到着して伝えられた、絶対に近寄ってはいけないという紋章を持つ3人。　そいつ達のせいで、お世話になった街が困っている。
お人好しのミーナには、素通り出来る話ではなかったのだ。
そろそろ、例の3人が来る頃だ・・・。
「・・・来た」
普通の温度とは違って、肌寒い空気と共にそいつ達は現れた。
緑色の髪をした奴、赤い髪をした奴、氷のように碧白い髪をした奴の3人が、ミーナ達の目の前に参上した。
3人は、ミーナ達に気が付いた。
「あぁ？」
「なんだ、あいつ等？」
赤い髪をした奴と、緑色の髪をした奴が同時に言い出した。　以後、こいつ等のことを赤髪、緑髪と呼ぶ。
真ん中にいた碧白い髪の男は、ミーナを睨んだ様子だった。
「アイスブリット！」
「「「！？」」」
ミーナを睨んだ後すぐに、呪文を唱える男。　ミーナ達はそれぞれに避けた。
後ろの赤髪も緑髪も、驚きを隠せないでいた。
「ってぇじゃねぇか！」
「いきなり失礼じゃない！」
男はキョトンとした様子で、ミーナとリュウを見つめた。
そして、ふふふっと笑う。
「お前達、呪文使いだろ？」
碧白い髪の男は、ヒョウと名乗った。
ミーナ達は、警戒して身構える。
ヒョウは、右手の手袋を外して甲の方に印された紋章を見せつけ

て来た。
氷の・・・紋章を。
「お前等、俺と殺り合いに来たんだろ？さっさと始めようぜ！」
ヒョウはそう言って、先程と同じ呪文を唱えた。
流石に二度目だったこともあって、3人とも氷の弾丸を素早く避ける。　ついでに、リュウがその氷を溶かしてみせた。　街に被害を出さないようにするためだ。
「止めなさい！わたし達は貴方達を止めに来ただけなの！！」
ミーナがそう言うと、ヒョウはくくくっと笑った。
続けてヒョウは言う。
「街の奴等か・・・。なら！俺を倒してみせろ！！」
ヒョウのその言葉と同時に赤髪と緑髪が足を揃えて剣を振り被った。　一番前にいたミーナに向かって、剣は振り下ろされた。
キィィンッ！という金属と金属がぶつかり合う音。　それと同時に、ヒョウは呪文を唱える。
「フリーズアロー！」
「フレアアロー！！」
それを打ち消すかのように、リュウも呪文を唱えた。
「スターアロー！」
打ち消し合うリュウの後ろから、光輝く矢が無数にヒョウめがけて飛んで行った。
犯人は勿論、サミーである。
ちょっと、矢の数が多く感じるのは気のせいか・・・？
「ぐぇっ！」
あ、気のせいでは無いらしい。　その証拠に、絶対に当たるはずの無いリュウに命中している。
「いってぇな！何しやがるサミー！！」
「あ～ら、ごめんなさい」
サミーの膨れっ面を見た限り、ちょっと出番が少なくてのやつあたりっぽい。

「な、なんだ？そいつ・・・」
喋る白い猫を見て、呆気に取られたヒョウはただそこに立っていた。

さて、一方ミーナの方はというと・・・。
「その程度でわたしに敵うとでも思った訳？」
と、赤髪・緑髪の２人の喉元に剣を当てて言った。
後ろから、周り込んで当てている。　２人は、下手な行動が取れずそのままで固まっていた。
おそらく、街の男が言っていた紋章を持つ者はヒョウだけであって、この２人はただの付き人のような役割なのだろう。
そう考えれば、この２人は雑魚同然。　最近まで魔獣相手に剣を奮(ふる)って来たミーナには、弱い相手だった。
「いい？貴方達以外にも強い人はいるの。あの街にもね。悪いことは言わないわ。街を襲うのを、今から辞めなさい」
ミーナは、いい？と、剣を強く当てて言った。　赤髪と緑髪の２人は、動かせる程度で首を縦に振って答えた。
あ、ちょっと涙ぐんでる。
返事を聴いたミーナが剣を外すと、勢いよくその場を去って行く。
そんなに恐かったかな～？と考えながら、ミーナは他の２人の下へと急いだ。

「ファイアーボール！」
え～・・・。　替わりまして、リュウとサミーとヒョウの３人・・・。
「キルスター！！」
チュドォォォォォンッ！！
シュビビビィィィィッ！！

ボォォォンッ！！

戦争ですかーー！？

先程から、止めなくてはいけないはずのヒョウを放って置いて、リュウとサミーの呪文のぶつけ合いが始まっていた。

ゴスッ！ベシッ！

「いい加減にしなさい！」

2人の呪文のぶつけ合いが止まった。　ありがとう！ミーナ！！

「そんなの後にして、さっさとヒョウを止めなさい！！」

まるで、母親のようにミーナは言った。

2人も、まるで子供のように渋々従った。

「何が何だか分からんが・・・。まぁ、いい！こっちから行くぜっ！！」

と、3人の準備が整うのと同時に、今まであのテンションに付いて行けなかったヒョウが口を開いた。

「フリーズキラー！！」

勢いよく飛び出した氷の結晶が、ミーナ達3人に向かって無数にぶつかる。

「キルフレイム！！」

その鋭利の結晶から避けるために、リュウが同じような呪文を唱えた。

ヒョウが放った氷のほとんどが、リュウの炎に溶かされてしまった。

ヒョウは、舌打ちをしてもう一度呪文を唱えて武器を作る。

氷の剣だ。

それを見て、ミーナも剣を構える。

リュウも、どこから持ち出したのか・・・一本の長い棒を手に取って構えてみせた。　一瞬の内に、それは炎を身に纏う。

「「はあぁぁぁっ！！」」

ミーナとリュウ、同時に攻撃を仕掛けた。

それを受け止めるヒョウだったが、氷が炎に勝てる訳も無く、虚しく蒸気と化しミーナの剱が喉元を捉えた。
「貴方の負けね」
と、ミーナが言う。
ヒョウは、呆気に取られてただ呆然としていた。　が、それから笑い始めた。
打ち所が悪かったのだろうか・・・？
そう考えるミーナとリュウとサミーだったが、３人の耳に入った言葉は意外なものだった。
「負けた、負けた！あー負けた！！やっと負けた！！！」
ヒョウは、嬉しそうに大声で言った。
彼は、負けたかったのだ。　自分より強い者と闘いたかったのである。
ミーナ達の方が、逆に呆気に取られた。
負けたことに感動しているヒョウに、ミーナは待ったをかけた。
「じゃあ、その為に街を襲ってた訳？」
「ああ」
怒りに震えるミーナに対して、ヒョウはケロッとして答えた。
更に、ミーナは怒る。
「ふざけ」
「ふざけんな！！」
「リュウ・・・？」
リュウは、ミーナの言葉を遮るかのように叫んだ。　そして、ヒョウに炎の棒を突き付ける。
”ジュッ・・・”という肉の焼ける音がした。
ちょっと臭い。
やられてる本人は、どうでもなさそうに笑っている。　その気になれば、氷で防ぐことも出来るからだろう。　だが、ヒョウはそれをしなかった。
「ははっ・・・。そっちの女が紋章を持つ者だと思ったのによ・・・

。猫が紋章を持つ者だとはな」
ヒョウは、検討違いだぜ、と苦笑した。
ミーナはリュウの手を止め、首を振って辞めさせる。
何を言っても無駄だと悟ったのである。
「いいのか？殺さなくて」
「わたしは人殺しにだけはなりたくないから。死にたいなら、自分で死になさい」
笑うヒョウに、ミーナは冷たく厳しく答えた。　その瞳は、碧い色が凍りついたようにも見える。　それと同時に、氷を扱うヒョウが凍りつくように固まった。
ミーナが言い放つ『死』という言葉に反応してしまう自分がいるのだ。
ヒョウは笑う。
何か分からないから笑う。　それしか、今は出来ないから・・・。
「あんた大丈夫？」
ミーナの後ろにいる2人は首を傾げていた。　ミーナの今の表情を見ていない2人には、何が起きているのかさえ分からない。
それ故に、そんな言葉しか掛けられないのだ。
「気に入った！お前、名前は！？」
ようやく笑いが終わったのかと思うと、ヒョウは嬉しそうにミーナの名前を聞いた。
「ミーナ・ドラグルゥ。ミーナでいいわ」
ミーナは冷たい瞳のまま、自分の名前を名乗った。
「そ、そんな瞳ぇすんなよ・・・。俺はヒョウ、それだけだ」
ヒョウは、少し脅えながら名乗った。
ついでに”捨て子だったんでな”と付け足して。
「ミーナ。お前に付いて行ってもいいか？」
「駄目」
何の余白も無く、ミーナはヒョウの申し出を断った。
「なんでだよ！」

ヒョウは詰め寄る。　ミーナは何気に嫌そうな顔をする。
「わたしは連合軍の総指令に会いたいだけ。だから」
ミーナはきつく睨んだ。　ヒョウは肩をすくめ、苦笑しながら悟ったように体制を整えた。
「なるほど・・・。人殺しは連れてけねぇって訳か」
ヒョウは短く息をつくと、クルリと向きを変えた。　そして、何も言わずその場を去って行く。　付いて行くことは諦めたようだ。
3人は、いなくなってしまうヒョウの姿をいつまでも眺めていた。

「ありがとうございました！」
街中が歓声に包み込まれたようだった。
最初に出会った男がミーナ達に言った。
あちこち、穴が空いたりボロボロになったりしているが、男は心よく許してくれた。
「これでメルガトの街も平和になることでしょう。それに比べれば、こんなもの・・・」
男は言葉を続けなかった。　いや、続けられなかったのだ。
目の前（ミーナ達の後ろ）に立たずむ男に驚いて。
男は、口をパクパクさせてそっちを指差した。　ミーナ達は首を傾げて、後ろを振り向いた。　そこには・・・。
「よっ！」
碧白い髪、翠色（みどり）の瞳、両手には黒い手袋をはめた男。　先程まで、闘っていた男。　氷の紋章を持つ男、ヒョウだ。
そのヒョウが、片手を頭の上でひらひらと振りながらそこにいた。
その後ろには、緑髪と赤髪の2人の姿も・・・。
「何してんの？貴方達」
相変わらず、ミーナの一言は冷たい。
そんなミーナの冷たさにも慣れたのか、ヒョウはニカッと笑って再び手を振った。

「んな瞳ぇすんなって～。俺らはもう殺し合いなんてしねぇよ」
まぁまぁ、とミーナをなだめながらヒョウは言う。　胡散臭(うさんくさげ)気に思うミーナだったが、とりあえずはヒョウを信用することにした。
「で、何しに来たのよ」
「仕事探し」
ミーナの質問に、ヒョウは笑顔で答えてみせる。　それには、街の男も呆れたようだった。
それもそのはず。
なんせ、街を今まで襲っていた本人なのだから。
「そんなこと許せる訳無いだろう！」
街の男は怒鳴って言う。　ヒョウは男を殴り、黙らせた。
『殺し』はしてないとミーナに釘付ける。
「それに、ただの親子喧嘩だ。黙っててくれ」

・・・・・・

「「「はぁ！？」」」
『間』が空いて、ミーナ達3人は声を揃えた。
街の男は首を傾げたが、すぐにヒョウの方に向き直した。
そして言う。
「お前のような悪魔、我が子だとは思ったことは無い！この街から出て行け！！」
ヒョウは無理して、な？、とミーナに笑いかけた。
街の男からは、優しさの”や”の字も見当たらない。
「”紋章を持つ悪魔”の俺は消える。今はコイツ等の仕事を探してんだ」
ヒョウがそう言うと、街の男は優しそうな男に換わる。
緑髪と赤髪は、オドオドとしながら前に出た。
街の男は2人を心よく引き入れる。　ヒョウとは全く反対の態度だ。

「引き受けた。だから、お前はさっさといなくなれ」
「はいはい。じゃあな、親父」
街の男が”出て行け”と言った瞬間、ヒョウは皆に背を向け去って行く。
ミーナ達もその場を離れることにした。　そろそろ、次の街に迎わなければならない、とリュウが言ったのだ。
街の男はミーナ達に礼を言って、緑髪と赤髪を奥の方に連れて行く。　忙しいようだ。

今日も空が青い。
ミーナ達＋約1名の旅は、まだ続く。

ＳＴＯＲＹ４：不思議な爺さん（前書き）

微妙です

STORY4：不思議な爺さん

今日は雨。
ミーナはサミーを抱えて、大きな葉っぱを傘代わりに道を歩く。
ちなみに、リュウはずぶ濡れだ。
ん？
約1名はどうしたって？
そりゃ、氷の傘で雨を防いでいるよ。
「ミーナぁ、まだ見え無ぇのか～？」
そろそろ雨も上がってきて、リュウが力無く言った。
「まだよ」
リュウは再び肩を落とした。　そんなリュウに、救いの声を上げたのはヒョウだった。
その片手には、望遠鏡らしき物が・・・。
「街・・・とは言えねぇが、村みたいな所があるぞ？あと、2～3キロってところか・・・」
嬉しいのだろう。　リュウは、それを聴いて自分が濡れていることを忘れたように雄叫びを上げた。
五月蝿いリュウを黙らせるために、ミーナは睨む。　ついでにヒョウも睨んだ。
「なんで貴方がここにいるのよ？」
ヒョウはシラケて肩をすくめる。
「別に～？俺が行きたい方向にお前等がいるだけ。文句あっか？」
ミーナは呆れて、それ以上何も言わなかった。
”とりあえず、進もう”という考えが出てしまったからだ。　ミーナは、足をどんどん進めて行った。
その村は、終わっていた。
え？

意味が分からない？
まぁ、簡単に言うなら『ゴースト・タウン』ってところかな？
要するに、ミーナの村みたいな所だ。
３人＋１人は、雨宿りをしながら終わった村を眺めていた。
妙に懐かしさを思えるミーナとサミー。　気味悪がってるリュウ。
そして、何故か楽しそうにしてるヒョウ。
合計４人は、ある家を見つめていた。　唯一、灯りを灯している目の前の家を・・・。
「・・・行ってみる？」
サミーが嬉しそうに聞いた。　ミーナとヒョウも、それに賛成する。
リュウは・・・。
まぁ、彼にそのような権利は存在していないが・・・。　一応、反対だった。
「よし、決まりだな」
ポムッ、と手を打って言ったのはヒョウだった。
賢くみせるように指を１本立てると、再び口を開いた。
「行こう。このまま、ずっと雨宿りって訳にもいかないだろ」
４人は家へと歩き出した。

その家は、意外にも小綺麗にしてあった。　もし、今日が雨でなかったら、終わった村には似合わない姿となっていただろう。

ジリリリリ・・・

ドアのベルを、サミーが（勝手に）押す。
家の中から”は～い”と、返事が返って来た。　明るいが、決して若くは無い男性の声。
ガチャリ、と音がすると中から白い髭のお爺さんが顔を覗かせた。
「なるほど。さ、中に入りなさい」

その家には、お爺さんが1人で暮らしているらしい。
「わしの名は、ユリーク。『リーク』でいいぞ・・・紋章を継ぐ子供達」
リークはそう言って、”ほっほっほっ”と笑ってみせた。
ミーナ達にとったら驚きである。　初対面、しかも今知り合ったばかりの人間だ。
リークはミーナの側に寄って来る。
「お前さんも、紋章を継ぐ子じゃな？」
ミーナは首を傾げ、腕のサポーターを外した。　その下には、型(かたち)だけの蝶の痣。
自分でも、何故こうなっているのかが分からない。　そう思いながら、ミーナは自分の痣をまじまじと見つめていた。
「わたしには痣がある。でも、呪文は使えない・・・」
ミーナが呟くように言うと、リークは再び”ほっほっほっ”と笑った。
「それは、お前さんの強さが紋章に伝わっていないからじゃ」
「ち・・・か・・・ら・・・？」
リークの言葉を、弱々しくミーナは繰り返す。　他の3人も、首を傾げていた。　その様子に驚いたのは、勿論リークである。
「お前さん達、知らんかったのか・・・？」
リークは呆れた様子で、ミーナの腕を取って改めてその紋章を見つめる。
「この紋章は『蝶』。この世で3番目に強い紋章じゃ。伝説の勇者の中にはいなかった紋章でもある・・・」
リークが一息ついたところで、サミーが口を開いた。
「で。ミーナの秘められた”力”が、その紋章の力を上回ってる・・・・・って訳ね？」
リークは驚きもせず、ただニコリと笑って頷く。
ますます、ミーナの頭は混乱した。　自覚が無いのだ。　無理も

無い・・・。　今まで、ただの人間だと、紋章を継ぐ子ではないと思って来たのだから。
「おぃ、爺さん。なんでそんなことまで知ってんだ？」
ソファーを独り占めするヒョウが言う。
多少の態度のデカさは気にしないとして・・・。（汗）
ヒョウは、胡散臭気に鼻をほじりながら爺さん、リークの正体を求めた。
「わしは、ただのジジィじゃよ。ヒョウ、君」
ヒョウは、寝そべっていた身体を起こして”は？”と聞耳をたて直しす。
「な、なんで俺の名前を・・・！？」
「その『氷』の紋章。そして、その位置。その瞳。メルガトの街を出て以来じゃな」
リークは再び”ほっほっ”と笑ってみせる。　ヒョウはその顔に見覚えがあった。
凄く・・・そう、捨てられる前に見たことがある顔だ・・・。

一瞬、ヒョウが閃いたように瞳を輝かせた。
「あ！あんた、昔メルガトにいた・・・！？」
言われた本人は、何も答えずただ笑った。　”ハズレ”では無いらしい。
「お前さん達、これからどこに行くつもりじゃ？」
ガラリと話を変えてリークは言う。
それに答えたのはミーナだった。　しっかりと、しかし、遠くを見つめて・・・。
「連合軍の総指令に会いに行くつもり」
リークは、そうか、と笑う。
よく笑うジジィだ。　リュウがそう思いながら、一緒に笑った。
ミーナは依然として、遠くを見つめたままである。
「連合軍は、この先を2つ程越えた所に立たずんでおる。誰かを探

しているらしい」
ミーナ達は、一斉にリュウを睨んだ。
『お前のせいで』のオーラが漂う。　特にミーナのが強い。　今まで笑っていたリュウの顔が、苦笑と化する。
「そんな顔すんな！文句があるならそこに行けばいいじゃねぇか！！」
リュウの、最もらしく聞こえる意見にミーナ達は納得する。
リークは笑いながら見ているだけだった。

と、言う訳で・・・。
再び、旅に出ることになったミーナ達一行は、カラッと晴れた空の下をゆっくりと進み始めるのであった。

ＳＴＯＲＹ４：不思議な爺さん（後書き）

感想・評価　待ってます

ＳＴＯＲＹ５：連合軍・総指令（前書き）

感想・評価お待ちしております！

STORY5：連合軍・総指令

あれから1週間、まだ例の街は姿を見せない。　食料は無い。
しかも、暑い。
ずっと歩き回っていたサミー以外の3人は、ぐったりとして歩く。
「あ〝つ〝い〝」　の一言を、全員が口を揃えた。
そして、ヒョウが倒れた。
ドサッ　という、一般的な音が聞こえる。
その隣で、同じく　ドサッ　という音が聞こえた。
「あああぁぁぁぁぁぁぁ！！ヒョウ、ミーナ！しっかりして～～！！！」
サミー、絶叫する。
その後ろから、ポテッ　という軽い音がした。　そこには、軽くなった大きな荷物を背負って倒れたリュウの姿があった。
「リュウも倒れた～～！！！」
サミー、再び絶叫。
それにしても・・・。　リュウ、”ポテッ”て・・・（呆）。
サミーは、倒れたミーナを起こそうと頑張ってみる。　だが、その小さな身体では多少の無理があった。
遂に、サミーも暑さに負けその場に倒れてしまった。
目が霞む。　頭もクラクラしてくる。　意識が遠のいていく・・・
そんな感覚に陥った。
その時、確かに聞こえた。　大きな鳥の、翼の音が・・・。
「あぁ、きっとハゲ鷹ね・・・。これで、終わり・・・かぁ（泣）」
サミーはそう呟いて、瞳を閉じた。　だんだん、意識が無くなって行くような感覚に・・・・。

ガチャガチャ、ザワザワ。　何だか、やかましい・・・。
ハゲ鷹が調理の準備でもしてるのかなぁ・・・？

サミーはそう思いながら、そっと瞳を開けた。
空・・・は、なかった。
古ぼけた、木の天井がそこにあった。
「ここ、は・・・？」
サミーは、呟いた。
目の前は、少し古い宿屋の個室・・・。
「あ、目が覚めたんですね！？今、温かいミルクをお持ちします！！」
ひょいっと顔を覗かせた少女が、そう言って階段を降りて行った。
瞳の紅い、少し大人びた少女だった。
ハゲ鷹に食べられたのではない、ということを安心していると、再びその少女が目の前に現れた。　少女は、ニッコリと笑ってサミーにミルクを渡す。
「大丈夫ですか？あんなに暑いのに、水も持たずに旅をされるなんて・・・危ない所でしたよ？」
少女は”シェラ”と名乗り、またニコリと笑った。
「驚かないんだ？アタシ一応、猫なんだけど・・・？」
サミーが言うと、シェラは元気よく”はい”と答えた。　サミーは、はっとした様子で辺りを見回す。
「ほ、他の皆は！？」
「大丈夫です。皆さん、下で食事をされていますから」
サミーは、ほっとして息を吐いた。　一安心してお腹が空いたのだろう。　サミーのお腹から”ぐぅぅ～”という音が聞こえた。
シェラにクスクスと笑われて、恥ずかしそうに頬を赤く染めたサミーは、温かいミルクを飲み干して階段を駆け降りて行った。

そこで見たのは、皿の山々だった。　その山に、埋まるようにいるのが例の3人だ。
サミーは、心配していた自分と目の前にいる3人の様子が面白くて、吹き出して笑ってしまった。　その笑い声に気が付いて、ミー

ナが手を止めた。
「サミー！起きたのね！！」
頬に付いた食べカスが気になるが・・・。
サミーは、ミーナに飛び付いた。
「ミーナぁ～！心配したじゃ～ん！！（泣）」
「あはは（汗）。ゴメンねサミー。あ、シェラにお礼言った？」
ミーナに言われて、慌てて礼を言った。　が、シェラは首を横に振った。
「いえいえ、実際に助けたのはピィですから・・・」
”ピィ？”と、ミーナとサミーが首を傾げる。　すると、その答えをリュウが言った。
皿の山に顔を埋めながら、右手に持ったフォークでリズムを刻んで。
「”ピィ”はビッグバードだよ。絶滅種の・・・だよな？シェラちゃん（笑）」
「はい。憶えていてくれたんですね！リュウさん！！」
リュウの発言に、シェラは頬をほんのりと染めて喜んで言った。
そして、サミーは気が付いた。　リュウとシェラが身に付けるピアスがお揃いだということに・・・。
「ねぇ・・・？そのピア」

バダンッ！！！！

「テメェ！姉さんに近付くなぁ！！」
その瞬間、飛んで来たのはシェラと同じ瞳の少年。　そして、真っ青な炎を足に纏っての蹴り・・・。
「「「「へ？」」」」
ミーナ、サミー、シェラの3人は、目を点にする。
少年の顔は、シェラに似ている。　が、とても幼い顔。
桃色の髪をしたシェラとは違って、水色の、しかも濃い色の髪を

している。
シェラの”弟”といったところだろうか・・・？
先程も”姉さん”って言ってたしね。
「げげっ！シュラ！！」
と、リュウは席を立つ。
そして、その飛び蹴りをギリギリで避ける。
「ちぃ・・・っ！！」
リュウは素早い動きで後ろに逃げる。　そして、”シュラ”と呼ばれた少年はそのあとを追いかけた。
テーブルに積まれた皿の山々が崩れ、落ちる音と割れる音が辺りに響く。
「え？あ、シェラ・・・？あの子、誰！？」
冷や汗を流して、ミーナが聴く。
「あ、弟・・・です」
同じく冷や汗を流して、シェラが答えた。

―さて、場所は変わりまして宿屋の外―
そこには、睨み合ったままのリュウとシュラの姿があった。
「表に出て闘いやがれ！リュウ！！」
「馬鹿！もうここは表だ！！」
と、言いながら2人は戦闘を始める。
シュラはやはり子供だ。　自分が間違ったことを指摘されたのが恥ずかしかったのだろう。　リュウに向かって、
「五月蝿い！」を言い続ける。
そんなシュラの左手の甲には、リュウと同じ『竜』の紋章があった。
だが、その紋章は金色に輝いている。　明らかに、リュウの紋章とは違うものだった。
「また、帰ってきやがって！僕は認めて無いからな！！」
で、ぐーパンチ！

当たってしまえば、身体は大火傷。　またしても、真っ青な炎を身に纏っていたのだから。
「きたねぇぞ！俺が敵わねぇと知ってるくせに！！」
またもや、ギリギリで避けるリュウ。　リュウの緑色の紋章より、シュラの金色の紋章の方が強いということだ。
「五月蝿ぇ！テメェの顔なんて見たくも無い！出てけ！！そして死ね！！！」

２人がドンチャンやっている中、ミーナとサミーとヒョウはオロオロするシェラを横に、お茶を煤って眺めていた。
一方的に攻めるシュラを眺めながら、ミーナはシェラに尋ねた。
「ねぇ？本当にあの子がシェラの弟？」
「はい。根は優しいんですけど、一端キレてしまうと手に負えなくなってしまうんですよ（笑）」
フォローのつもりだろうか・・・？　全然、フォローになっていないが・・・（汗）。
ミーナも同じように思ったらしく、目を点にして苦笑した。
と、ここでミーナは気が付いた。　調度、ミーナの腕にある痣の位置と対象になっているシェラの『蝶』の紋章に・・・。
綺麗な紫色の『蝶』の型をした紋章。
ミーナは、自分の痣と見比べる。　その様子に、シェラも気が付いた。
「あ！ミーナさん、私と同じなんですね！」
シェラが微笑んで言った。
「う、うん。まだ痣・・・だけどね」
ミーナは愛想笑いで返した。
その様子に気が付いたサミーが、シェラに質問する。
それは、シュラの紋章のことだった。　紋章を持つ者の１人でもあるサミーだったが、あの金色の紋章を見たのは初めてだったからだ。

「あぁ、あれは両親が『竜』の紋章同士だったからですよ」
シェラによると、同じ紋章を持っていたとしても、あの金色の紋章が身体に出るのは稀なことなのだという。
シェラの紋章が違うのは、シェラの体質には『竜』の力があわないからでは・・・？　と、シェラは考えているらしい。
「ふぅん・・・。そぉゆ～ことか」
ようやく、食べることを終えたのか・・・？　ヒョウは口元に付いた食べカスを袖で拭いながら言った。
「この街には、紋章を持った奴が沢山いたって訳だ・・・。俺のいた街とは逆にな」
つまりは、こういうことだ。
シェラとシュラが住むこの街には、昔から紋章を持つ者がいた。
だが、ヒョウの住んでいた街には紋章を持つ者がいなかった。
人間とは、簡単な思考の持ち主だ。　それが、人間に害にならないモノだと分かると”慣れ”が生まれてくる・・・。
分からなければ、ただ”嫌う”だけだ。　その者が、死んでしまったとしても知らん顔をしたりして・・・。
ま、この場合は前者がシェラ達の街で、後者がヒョウの街ということになる。
「いい加減にしないと、街が壊れるぜ？」
シケた話を振っておきながら、ヒョウは平然とした様子で未だに闘う2人を指刺して言った。
が、闘う2人の後ろから土埃が舞い上がって近付いて来るではないか。
あれは、馬が走る時にでる土埃だ。　それに気が付く2人は、闘いを止めた。
”ちっ”と、シュラが舌打ちをする。
「またか・・・。なんで今日はこう邪魔者が多いんだ？」
ミーナ達も、その方向を眺める。　よく見れば、そこにいるのは黒い軍服を身に纏った者達・・・ざっと、１０～２０人！

その集まりが軍だと分かった瞬間、ミーナとサミーとリュウの瞳が険しくなった。
特に、リュウが。
ミーナよりも、険しくなる。
そして、呟く。
「来やがったな。連合の総指令！」
ギリッ・・・と奥歯を噛み締め、土埃の方向を睨み付ける。

暫くして、数１０人の軍人が宿屋の前の地に立った。
その真ん中から、白いマントに身を包んだ青年が姿を見せた。
その前髪は１つに束ねてあり、クルリンッと巻いてある。
はっきり言って、変だ。
碧い瞳の青年は、大声でシェラを”殿”付けで呼んだ。

ドゲシッ！！！

「ぐえっ」
リュウが総指令と呼ぶ、碧い瞳の青年が宿屋に足を踏み入れた瞬間、シュラの飛び蹴りが炸裂した。
情けない声と同時に、青年の白い帽子が地面に落ちた。
その額には、白い２枚の羽が交差する模様、『鳥』の紋章があった。
「小僧！何をす」

バキッ！！！

また、総指令が言い終わる前に殴られる。　今度はリュウだ。
「貴様！リュウ・サンドラゴだな！今日こそ牢にブチ込んでやる！！」
「やかましい！お前だけには言われたく無いぜ！ただ、俺が邪魔だ

からって指名手配犯なんかにしやがって！！」
総指令ががなり、リュウががなる。
暫く・・・いや、ずっと、それは続いた。
もうそろそろ、シュラがキレそうになって・・・。
いや、その前にサミーがキレた。
「スターアロー！！」
キンキンと響く光線の矢の群れが、軍人達とリュウを巻き添えにして襲いかかった。
その呪文のおかげで、殆どの軍人達がやられてしまった。
リュウと総指令の2人は、なんとか生き残っている。
「うるさーーーい！！！」
サミーは、その身体の小ささからは想像出来ないくらい大きな声で叫んだ。
総指令は声が止むのを待ち、ここに来た目的を話し始めた。
「ワシは、シェラ殿に会いに来たのじゃ！今日こそ、ワシの求婚を受けてもらうためにの！！」
一瞬、皆がシェラを見た。　そして、もう一度総指令を見る。
「「「・・・は？」」」
ミーナ達がキョトンとする中、リュウとシュラは不機嫌そうに総指令を睨んでいた。
と、ここで総指令が名乗り始めた。
「ワシの名は、パオ・パピーラ。勇者『パオ』の名を継ぐ者！軍の者はこう呼ぶ！《鋼の鷹》と！！」
しゃがれた声で、しかも、爺臭く喋るパオ。　これで２０歳（はたち）だというのが信じられない・・・。
そして、パオは殴られた・・・（汗）。
殴ったのは、リュウだ。
「ふざけんな！シェラちゃんは俺の婚約者（フィアンセ）だ！このピアスが証拠だぜ！！」
リュウは耳のピアスをキラリと輝かせて皆に見せた。

それらは、ミーナの祖母の墓と同じ石・・・ルリコンで出来たピアスだった。
ルリコンと言っても、色々ある。
シェラのピアスのように紅いルリコンをスゥルリコン。
リュウのように翠のルリコンをソゥルリコンというのだ。
この、ミーナ達の世界にも、様々な地域で様々なしきたりがある。
その内の1つが、現在リュウとシェラがしているピアスなのだ。
女がスゥルリコンを身に付け、男がソゥルリコンを身に付ける・・・これが婚礼のしきたりだ。
勿論、ミーナ達もそんなことは知っている。
一瞬にして、ミーナ達の目が点になった。
「じゃ、じゃあ・・・リュウが指名手配された理由って・・・？」
何かに気付いたサミーが、呆れた様子でパオに尋ねた。
パオは、足を肩幅に開き手を腰に、それはそれは偉そうな格好をする。
「邪魔じゃったから！」

その後、パオに嵐のように呪文の攻撃が降り注いでしまったことは・・・言うまでもない。

ＳＴＯＲＹ５：連合軍・総指令（後書き）

何かご意見がございましたら、メッセージでもいいので送って下さい（ ▽ｰ ）

ＳＴＯＲＹ６：運命の日（前書き）

ひっじょ～～～っに、短～～～いデス（汗）

STORY6：運命の日

そこにあるのはただの『闇』。　自分の姿さえ、見つけることは出来ない。
そんな『闇』の空間。
そこに立つ黒髪で長髪の男。　獣でも無く、魔獣でも無い。　そして、人間でも無い。
ここには何も無い。
男の目の前にあるモノ以外。
黒きオーラを放ち、忽然と立ち尽くす1つの墓石。
そこに印されるのは、魔王・・・ステ・・・。　所々が欠けていて、何と印されているのか分からない・・・。
「そこにいるのか？」
男が言った。
「勿論だとも」
そう言ったのは、白い髭を伸ばした爺さん。
「随分、勝手なことをしてくれたようだな。ユリーク」
ユリークと呼ばれた爺さんは、ほっほっ・・・と軽く笑ってみせた。
「勝手では無い。これも、魔王が望んだこと・・・。『罪』ではあるまいて」
そう言うと、白い髭の爺さんの姿から白髪のちょいワル親父の姿に変えた。
ユリークの瞳は、紅く輝く。　魔族にしか現れない、紅い瞳・・・。
男は、仕方ないな、と溜め息。　男の名前は、ダーク。　『覇王』の異名を持つ魔族である。
ダークは、まぁいい・・・、と苦笑する。
一瞬、墓石のオーラが大きくなったように感じた。　が、2人は

気付いていない。
「ユリーク、貴様・・・何か企んでいるのか？」
「”まぁいい”のではなかったのか？」
２人は、笑っていた。　これから、何が起きるのかも知らずに・・・。
ただ、待っていた。
『魔王』が再び、復活する日を・・・。　彼ら魔族が、『運命の日』と呼ぶその時を・・・。

ＳＴＯＲＹ６：運命の日（後書き）

感想・評価待ってます

ＳＴＯＲＹ７：魔族見参　前編（前書き）

この小説の原作をようやく見つけだしました。
これで、少しは早めに投稿することが出来ると思います。
これからも、ヨロシクお願いします。　邪餽　珀磨

STORY7：魔族見参　前編

晴天に、怪しく黒い雲が迫る午後。
同じく、晴天のような男・パオに、ミーナとリュウとシュラと……とにかく、その場にいた全員の黒い雲が迫っていた。
彼の我儘のせいで、リュウはその身を追われ、ミーナとサミーは村を焼かれたのだ。
シュラは、姉を狙われるし。
シェラに至っては、彼のせいで宿屋を戦場として使われてしまったのだから・・・。
「は、話しをしよう・・・」
沈黙を打ち消そうとしたのは、やはりパオだった。
その瞬間、４人の怒りの拳を同時に喰らう。　バングルを着けるリュウと、喧嘩慣れしているミーナの拳が特に痛そうだ。
「”話し”だぁ？ふざけてんじゃねぇぞ、ごるぁ（怒）」
リュウが、再び殴る。
「あんた・・・『死』んでみる？」
ミーナの冷たい瞳と、『死』という語源に固まるパオ。
気持ちはよく分かるよ、とヒョウが頷いて見せる。
「な！なんだ貴様は！！」
「パオ総指令に向かって！！」
外（壁が壊れているため、すぐ隣）から野次馬共の声がする。
ミーナは、それをギロリと睨んだ。
一瞬にして、野次馬の声は消え失せた。
総指令のパオと同じ色の瞳なのに、何故か身体が凍りつく。
恐ろしかったのだろう。
「悲しいねぇ。総指令ともあろう方が・・・」
軍の野次馬の中から、ひょうひょうとした声が聞こえた。
真っ紅（まっか）な短髪に、紅い瞳と黒い瞳。

少々、自由に軍服を着こなした男だ。
「なんじゃと！？」
真っ紅（まっか）な短髪に、紅い瞳と黒い瞳。
黒い瞳以外は、見覚えのある顔・・・。　と、シェラは考えた様子。
男は、ニヤァと笑って目を見開いた。
それと同時に、空の黒い雲から蒼い稲妻が輝いて、その姿を見せた。
「おぃ、そこの白髪」
顎で示され、釈に障ったヒョウが睨んで見返す。
「勿体無ぇな、お前。それだけの力があるってのによ・・・」
「なんだ、テメェ。人のこと、どうこう言う前に名乗ったらどうだ？」
男は、ただ首を振った。　”ＮＯ”ということらしい。
「じゃあ、俺がテメェのいうことを受け入れなくても、文句無いだろ？」
ヒョウがそう言うと、男は肩をすくめてその場を面倒臭そうに去って行った。
何でも無かったかのように、風のように・・・。
その場にいた誰もが、『何だったんだ？』と呆けていた。

話しを戻すと・・・いや、話しなんて出来やしなかった。
ただ、問題を起こしたパオを一時期預かりボコる・・・基、反省して貰うように（拳で）説得することは決まった。
「いやいやいやいや！ちょっと待て！！」
と、やられる本人は納得していないが・・・。
「「「「「は？」」」」」
が、怒りの籠った４人の表情を見て口をつむぐ。
パオは、とりあえず謝った。　リュウの指名手配も無くなった。
ミーナの村を壊した、あの２人にも罰を与えた。

でも、シェラは諦めなかった。
いい加減、ウザイと思うシュラだったが、今は姉のシェラに言われた通りリュウと壁の修理をする。
「あんた、本名は？」
唐突に、ミーナが聴いてきた。　パオは、ポカンと口を開いて固まった。
「ジン・ドラングドゥ。・・・しかし、そんなことどうするというのだ？」
冷や汗を垂らしながら、上目線でミーナを見る。
そんなパオに微笑んで、ミーナは冷たい目線を送った。
「気にしないで。ただ、呪うのに借りるだけだから」
一瞬にして、（連合軍の）皆の血の気が引いた。　みるみる内に、白くなって、青くなって、土色になった。
両手を縛られているパオは、足だけで変な動きになりながらも急いで後ずさった。
「逃げても無駄。ミーナの呪いは強烈なの」
猫のサミーが言う。
再び、軍の皆が青冷める。　共に思ったのだ。　『猫が喋った』と・・・。
サミーは呆れた。
ミーナは呪いの準備を始める。
それを、なんとかヒョウが止める。
「あのなぁ、そいつ先程（さっき）から喋ってただろ？」
その場に重い空気が漂う。
ヒョウの肩をポンッと叩き、リュウは黙って首を振る。
その顔は、諦めを露にしている。
「連合軍の方って・・・」
今まで黙っていたシェラが、ゆっくりと口を開く。
シェラは、天使のように微笑んで言った。
「馬鹿な人が多いんですね？」

悪気は無いんだよ。　シェラは天然の毒舌少女だから。　あぁ、だからそんなに落ち込まないで・・・。
軍の皆さ～ん！　特に、パオさ～ん！！
目を覚まして！
魂、引き戻して！！
「ぁ、ご、ごめんなさい！私ったら・・・失礼なことを」
「いや！大丈夫じゃ！気にすることはない、シェラ殿！！」
シェラの瞳に涙が溜まり、素早くパオは平気なフリをした。
シェラは安心して、涙を拭きながら再び微笑んで見せる。
一瞬にして、軍の皆さんに笑顔が戻る。

『馬鹿だ』

皆の頭にその言葉がよぎった。
とりあえず、軍の皆さんはパオだけ残して退却してもらった。
そして、とりあえずパオをボコボコにして、その日は終わった。

雲1つと無い、晴天。
シェラは、溜まっていた洗濯物を外に干していた。
シュラとサミーはその手伝い。　ヒョウも一緒にだ。
ミーナは、近くの林に赴き食料の調達に。
リュウはパオを見張っている。
「お主も、”紋章を持つ者”なんじゃろ？」
屋根裏で、静かにしていたパオが尋ねた。
リュウは否定しない。　あえて、肯定もしないが・・・。
「だから、どうした？」
パオは、やはり・・・、と話し始める。
「紋章を持つ者同士、惹かれ合うモノがあるんじゃろぉな・・・」
「だからって、シェラちゃんは渡さねぇぞ」

パオは、リュウの返事（？）にふっ・・・、と笑う。
その笑みには、余裕さえ見える。　だが・・・。
「ケチ！！」
「って、うをぃ！？」
リュウのツッコミは、パオの溝落ちに見事に入った。
パオは両手を縛られている。　ついでに足も。
まるで、陸に上げられた魚のようにのた打ち回る。
言葉は無い。
「ふざけんなよ？一応、親同士が決めたことでも・・・俺の婚約者には変わり無いんだからな！！」
まるで、鬼のような形相でパオを睨む。
「わ、分かっておる！じゃが・・・シェラ殿がわしを選べば、文句無いじゃろ？」
パオは、視線を反らしながら答えた。
「それは無ぇ」
「なんでじゃ！」
２人はやいのやいのとがなり合う。　だが、それは幼い声でかき消された。
リュウは、パオを逃がさないようにしっかりと捕まえ、コイツがいるからだよ、と言って苦笑する。
「よく分かってるじゃない？馬鹿と大馬鹿」
濃い水色の髪、紅い瞳の少年。　２人にとって、最愛の女性シェラの弟であり、２人にとって最大の天敵。
シュラである。
シュラは、リュウの両手もついでに縛る。　勝手な行動をしないように、パオの縄に結び付けて・・・。
「お前等２人とも外出禁止！ついでに、昼飯も抜き！！」　それだけ言って去ろうとするシュラに、リュウとパオの２人は待ったをかける。　が・・・。
「何か文句でも？」

全身に青白い炎を纏って、シュラは振り向いた。
リュウもパオも、首を横に振って答えた。

シュラが下に降りると、殆ど同じタイミングでミーナが帰って来た。
「あ・・・」
「ただいま。ミーナよ、憶えててね？」
”忘れる訳無いよ”とは言えない。　シュラでさえ、ミーナは恐いと思ったのだ。
「うん。分かった」
と、シュラは明るい表情を作って笑った。
ギリギリ、バレて無いはずだ。
「やっぱ、恐いか・・・」
バレバレだったようだ。
シュラは苦笑した。
ミーナは話しを変える。　今日の収穫と、パオをこれからどうするか、について。
「そっか・・・ミーナ達は村に帰るのか」
「いいよ。俺ここに残るから」
皆がしんみりしている中で、ヒョウがしれっとして言った。
一斉に、皆がヒョウを見る。
「い、いいの？」
ミーナが聴くと、ヒョウは頷く。
どうせ戻る所も無いし、とヒョウは言う。
「あ、ありが」
『御免下さーい』

声のした方向へ向かうと、そこには1人の青年が立っていた。
青緑色の髪をした、優しそうな顔の青年だった。
シェラ、シュラ、ミーナ、サミー、ヒョウの5人は首を傾げた。

今は、修理のため宿屋はやってない。　勿論、表にも知らせは出している。　街にも、一応話しはした。
しかし、青年はそこにいる。
「あの・・・。何か？」
「はい。私、サッドと申します。シェラ様ですね？」
サッドと名乗る青年は、シェラの方を向いて聴いた。
「は、はい。そうです・・・けど」
戸惑いながらシェラが答えると、サッドはニッコリと笑った。
あまり、笑っているとは言えないくらいに瞳はそのままだ。
嫌な感じがする。
そう、感じ取ったミーナとシュラが身構える。
「貴方を、誘拐しに来ました。シェラ・コルベール」

一瞬、間が抜けた。

何か、さらっと言いやがった。
「では、今宵・・・シスターのカネでお待ちしております」
ミーナ達が呆けている間に、シェラはサッドと共に消えていた。
既に唖然とする４人。
見れば、リュウとパオも降りて来て唖然としている。
外出禁止って言ったのに、とシュラは青筋を立てる。
ま、今はそんなこと気にしている暇など無いが・・・。
「お前・・・何やってんだよ！？」
リュウは、自力で両手に巻かれた縄を引き千切る。
そのまま、シュラの両肩に手をやり揺さぶる。　力一杯に、だが、シュラは唖然としたままだ。
シェラがいないことに気が付いたリュウは、凄い形相でシュラとヒョウを睨んだ。
シュラは知らなかった。　リュウの今の顔を・・・。
今まで、見たことの無い、シュラでも”恐い”と思ったその顔を・

・・・。
もう、何年も同じ奴のヘラヘラ顔を見てきたはずなのに。
「お前、守るんじゃないのか！？俺の代わりに守るんじゃなかったのかよ！！？」
「・・・・・・・」
リュウは、ギリ・・・ッ、とシュラの肩を掴む。
シュラは黙ってうつ向く。
ヒョウも、何も言わない。　サミーが、何か言おうとするがシュラ自身がそれを止める。

バキッ！！！！

「分かってる。そんなこと・・・」
「じゃあ、なんで殴ったんだよ！！」
何時ものように、倒れはしなかったが目の周りには、大きな青痣が出来ている。
シュラは震えている。　急だったとは言え、たった1人の姉を連れ去られたのがショックだったのだろう。
それを見て、リュウは責めるのを辞めた。
「もういい・・・。お前はそこにいろ。教会に行ってくる」
リュウの瞳は真っ直ぐだった。　まるでシュラを見ていない。
目の前にはいないシュラを探すようだ。
サミーは問う。
何故、そこだと思うのか、と。
長いことこの街に通っていたせいか、リュウは街の者達よりも街のことを知り尽くしてしまったらしい。
「この近くに、古い教会がある。あそこは、聖なる場だ。魔術も、呪文も使えない」
交渉の場には打って付け、とリュウは言う。
しかも、笑みまで溢して・・・。

「行ってくる」
「待って、わたしも一緒に・・・」
リュウが言うと、ミーナが身を乗り出して言う。
だが、リュウは手を出して止める。
「俺は、シェラちゃんの婚約者だ」
つまり、付いて来るな、ということだ。
リュウは、笑って出て行った。　ついでに、リュウは言い残した。
1時間経っても戻って来なかったら、教会に来るように、と。
「なんで、あそこまで・・・？」
リュウの出発を見送った後、サミーが呟くように言う。
それに、ミーナは答える。
「人間じゃ無いからよ」

ＳＴＯＲＹ７：魔族見参　前編（後書き）

感想・評価　お待ちしております！

ＳＴＯＲＹ８：魔族見参　後編（前書き）

感想・評価・メッセージ　お待ちしてます！

ＳＴＯＲＹ８：魔族見参　後編

１時間と１０分が経った。　リュウは、未だに帰って来ていない。
「行こう。皆で」
シン・・・、とした空間を消すように、ミーナが言う。
宿屋の真ん中で、ミーナ達は塊ってじっと待っていた。
「行こう。皆で」
なかなか動こうとしない皆を見て、ミーナはもう１度言った。
最初に動いたのはサミーだった。　次にヒョウ、そしてパオ・・・。
だが、シュラは動く気配さえ感じさせない。
「シュラ、行くよ」
それでも、シュラは動こうとしない。
その瞬間、シュラの顔が横を向いた。
ペシッ、と軽い音だったが、その頬からはタラリと少量の血が流れている。
殴られたのだ。
殴ったとしても、ダメージさえ与えられぬその小さな腕で・・・。
「いいから、来い！！あんたの姉さんでしょ！！」
「・・・・うん」
シュラは、泣いていた。　涙は流さず、心で泣いていた。
ようやく動いたシュラの顔は、今にも泣きそうだったのだ。

カラッと晴れて、白い雲が少ない今日の空。
教会の天井は、ポッカリとその空を見せていた。
もうすぐ日没。　辺りが赤く染まる中で、リュウは身体を赤く染めて立ち尽くしていた。
目の前には、笑みのままで動かないサッドとかいう人物。
「こんなものですか・・・。やはり、人間はつまらない」
夕陽に照らされて、サッドの笑みが恐ろしく思える。

リュウとサッドには、大きな差がある。　彼は人間ではない。
基礎から、身体の構造が違うのだ。
「強ぇ、強ぇな。やっぱ・・・・！！」
当たれば、相当なダメージだろう。　だが、当たらない・・・・。
当てられない・・・。
スピードが違う。
しかし、リュウは諦めない。
目の前には、守るべき女性（ひと）がいるのだから・・・。
「もうすぐ、アイツが来るぜ？この俺様の・・・義弟（おとうと）がな！！」
リュウは叫んだ。
そうしないと、声が出なかったからだ。
笑った。
何かを確信したように。
『＊＄％＃＝ぁ・アロー！！』
何を言っているか分からない呪文が、教会の外から放たれた。
巨大な火炎が、閃光が、鋼の羽が。
それは、リュウのすぐ隣を通過し、サッドに向かう。
サッドの笑みが消え、素早く避ける。
「はぁぁぁぁっ！！」
その後に続き、ミーナが剣を振るう。
音は一瞬。
そして、サッドの肩から下は床に落ちた。
「なるほど・・・。数で来ますか・・・」
冷や汗を流し、呟く。
ですが・・・、とサッドは続ける。
落ちた腕を拾い、サッドはミーナを傷付けずに止める。
「私はある方から頼まれたのです。ミーナ様に伝えるように、と」
ミーナは構えていた剣を降ろした。
初めて見せた、サッドの闇色の瞳に驚いて・・・。
誰にも聞こえ無いように、ミーナは”やっぱり”と呟いた。

「あんた・・・魔族ね？」
サッドは再びニッコリと笑う。
「語名答」
ミーナは、深呼吸で落ち着く。　そして、その用件を質問した。
サッドは、ゆっくりと明確に答える。
「”我は、ここにいる”」
「！？」
サッドがそう言うと、ミーナの腕が熱くなる。　本人が”熱い”と感じ、苦しむ程に。
「あああああっ！！！！！」
ミーナは、特に熱く感じる部分を反対の手で抑える。
そこは、調度『蝶』の痣がある。
「ミーナ！！」
「おい！しっかりしろ！！」
サミーとリュウが、必死に呼びかける。
「わたしの用件はこれだけです。あぁ、シェラ様には何もしてません。出来ませんしね・・・」
サッドは、肩をすくめて言う。　あぁ、もう1つ・・・と言い足す。
「魔王は、もうすぐ復活する！・・・では」
サッドは消えた。
影も形も無い。
ミーナも、叫ばなくなっていた。　叫び疲れたのか、気を失っているようだ。
サッドの言葉通り、シェラには何もされていなかった。
今までの疲れで、眠っているだけだ。
『なぁんだ。終わっちまったのか・・・』
聴き憶えのある声が、上から聞こえた。
皆が一斉に上を見上げる。
そこには、紅い髪、紅と黒の瞳の軍人が。

「シェラが拐われたって聴いたから来てみたんだがなぁ・・・」
「テメェ、何者だよ・・・？」
リュウが問う。
男は、ニヤリと笑いながら”帰ってからだ”と言った。

シェラが目を覚ました時、目の前にいたのは紫の瞳と黒の瞳を持った金髪の青年だった。
あの青年とは別の、ドットアイの青年。
「お前がシェラＫａ？」
語尾がなんだか鈍っているが、それ以外は普通の青年だった。
「あ・・・なた・・・は？」
「オレ？オレはゴッド。『雷』の紋章を持つ者Ｄａ」
金髪の青年、ゴッドは言う。
シェラは、皆の無事を尋ね、安心していいと言われてほっとする。
ゴッドは、別の部屋にいたリュウやサミー達を呼ぶと、どこかへ行ってしまった。
呼ばれた皆は、なんだなんだ？、と集まって来る。
「よぅ。ゴッドに聴いたぜ、シェラが起きたんだって？」
ゴッドが出て行った所から入って来たのは、紅い髪の男だった。
コイツは未だに名乗っていない。　リュウ達はそれに腹を立てた。
「そろそろ、教えてくれねぇか？あんた、シェラちゃんの何なんだ？」
と、リュウが聴いた。
男は、それに答えるように１度、深呼吸をする。
「俺の名は、ルーク・コルベール。そこにいるシェラの兄・・・ってことになるな」
・・・・・・。

「はぁ！？」
一番びっくりしたのは、リュウだった。
他の皆は・・・。
ある者は、読みかけの本を床に落とし、ある者は、食べかけのパンを床に落とす。
パオに至っては、ショックで言葉さえ無い。
「・・・僕に兄さんがいたのか・・・」
シュラは、突然現れた兄の存在に戸惑っているようだった。
そんなシュラを見て、ルークはその小さな子供の頭をポンッと叩いた。
「よく、頑張ったな」
ルークは微笑んで言う。
その微笑みとは逆に、リュウやパオには鬼神の表情を見せる。
さぁて・・・、とルークは指を鳴らす。
「俺がいねぇ間に、な～んかしなかったろうなぁ（怒）」
「てか、アンタ今まで何してた訳？そんな、小さな弟を残してさ・・・」
ヒョウは、ルークの鬼神な素振りを見ても平然として言った。
一瞬、嵐が起きそうになるがすぐに収まった。　ヒョウのお陰だ。
うん・・・。
ヒョウの質問に、ルークは黙って自分の右目を指差した。
「俺のこの瞳（め）」
「「「瞳（め）？」」」
リュウとパオとヒョウが、同時に返した。
ルークは、更に続けて言う。
「人間にはあり得無いモノだ。魔族の手が掛っている」
・・・・・・。
・・・・・・。

皆、黙った。
誰も口を開かない。
リュウとパオは特に、目を点にして呆けていた。
「んで？アンタ、魔族な訳？」
口を頬張らせて、寝惚けた様子でミーナが言った。
てか、いつ起きたお前！！
「お？起きたＫａ。大丈夫かよ、姐さん」
「うぉっ！？ゴ、ゴッド？お前、いつの間に！？」
ルークの姿は消え、ゴッドの姿がそこにあった。
ミーナは、驚きもせずにただ目の前の料理に手を出す。
「残念ながら、オレ等は魔族じゃ無ぇＹｏ。変な体質ではあるけどＮａ」
『オレ”等”？』
”等”を強調して、皆が口を揃え、首を傾げた。
ゴッドが、そう！、とにこやかに言うと次第に髪の色が変化していく。
金髪から紅髪（こうはつ）へ。
紫色の瞳から紅色の瞳へ。
少年を思わせる顔から、少し大人びた顔へと姿が微妙に変化する。
先程、何故ゴッドが現れたのか今分かった。
「ま、こういうことだ」
変な語尾も無く、男らしいドスの効いた声が皆の耳に入って来る。
そこには、ゴッドの姿は無くルークの姿だけがあった。
「なるほどね。それが理由か・・・」
と、ヒョウが呟く。
続けてミーナが、碧い目をルークに向けて言う。
「で？ベースの人は誰？」
ルークは驚いた様子で、感心した。
「分かるのか。大したもんだ」

ミーナは、感心無さそうに、まぁね、と答える。
突然、ルークは瞳を閉じた。　そして、それを合図にどんどんルークの背丈が小さくなっていく。
髪も、少し長くオレンジ色に変わる。
ルーク・・・だった人物は、瞳を開いた。
綺麗なオレンジ色の左目、黒い右目。
身長は、シュラと同じくらいだろう。
「は、初めまして！」
ミーナ達の目の前に現れたのは、小さな少年だった。

ＳＴＯＲＹ８：魔族見参　後編（後書き）

ゴッド…本名：ゴッド・ナガル。金髪、紫色の瞳。２０歳

ルーク…本名：ルーク・コルベール。紅髪、紅色の瞳。２５歳

ＳＴＯＲＹ９：ミーナの旅（前書き）

感想・評価・メッセージ　お待ちしてます！

STORY9：ミーナの旅

7人の目の前に現れたのは、オレンジ色の髪と瞳のシュラと同じくらいであろうかと思わせる少年だった。
少し、オドオドした様子で上目使いで挨拶をする。
「あ、あの・・・。初めまして・・・って、これは先刻言ったか・・・。えぇ～と、あの・・・」
はっきりしない子だ。
ミーナは、少々ふらつきながらその少年に近付いて行く。
少年は、びっくりして身体をこわばらせる。
「あ、あの！」
「君の名前は？」
ミーナは、今まで見せたこと無い程に微笑んで聴いた。
少年からして言えば、”優しいお姉さん”に見えるのだろう。
照れ臭そうに、少年の頬がほんのりと赤くなる。
「ボクの名前は・・・ムムです。ムム・アインツ。あの、一応『風』の紋章を持ってます」
ミーナは、そう、と再び微笑んだ。
そして、さりげなくその身体の秘密を問い出す。
ムムは、騙されたように語り始めた。

ムムは歩いていた。
ただ、家からいつもの百貨店に行くために。
それだけだった。
ムムは、ある男に会った。
ユリークと名乗った、白髪のお爺さんだ。
闇色の瞳をしていて、黒いフードを身に纏っていた。
お爺さんは言った。
『強くなりたくはないか？』

勿論、ムムは強くなりたかった。　なんせ、気が弱いことがコンプレックスとなっていたからだ。
ムムは、『なりたい』と言った。
すると、お爺さんは聴いたことのない呪文を唱えた。
その呪文を聴いていると、なんだか眠くなって・・・。

気が付いたらこうだったんです、とムムは下を向いて呟くように言った。
「そしたら、街の皆がボクを殺そうと・・・」
ムムは、とうとう泣き出してしまった。
「ムム。あなたの中にはあと何人いるの？」
ミーナに言われて、ムムは指を折って数え始める。
「えっと・・・。1・2・3・・・4人です！」
「4人！？」
リュウが、その身を乗り出して言った。
あと、4人・・・。　つまり、ムムの身体には合計7つの人格がある、ということなのだ。
「”紋章を持つ者は惹かれ合う”・・・か」
パオが言うと、皆の目が集中する。
以前、捕まった時にリュウに自分が言った言葉だ。
ミーナは、なるほど、と何かを納得した様子であったが、1つだけ分からないことがあった。
魔族の目的だ。
以前に会ったことのある、あのユリークが魔族だったということも驚いたが、今日現れたサッドとかいう魔族も謎だ。
ミーナは、自分の腕を見つめる。
見つめる先には、今まで痣でしかなかった『蝶』の紋章・・・。
サッドから聴いたあの一言で、姿を現した。　あれは、何を意味していたのだろう。
そして、明らかにシェラのとは違い、闇色の紋章の『蝶』をただ

見つめる。
この世に、魔族以外で闇色の何かを持つ人間など存在しない。
ムムを殺そうとした街の人達は、彼の闇色の片目を恐れたのだ。
「サミー、リュウ。行きましょう。彼等は、わたし達に用があるみたいだし」
ミーナの突然の決断に、サミーとリュウは驚きもしなかった。
サミーもリュウも、ミーナの行動に慣れてきたようだ。

決断してから、1日が過ぎ、宿屋の前には大きな荷物を背負ったミーナ、サミー、リュウの3人の姿があった。
「じゃ、後のことは頼んだわよ。ヒョウ、1週間くらいしたらパオを迎えに軍の奴等が来るけど・・・」
「へぇへぇ、暴れんなってんだろ?分かってる。それは、最終手段にしておくから」
ミーナは、念を押して”頼むわよ”と言う。
ヒョウは、手をヒラヒラと振って返事をする。
「あのっ!!」
3人の後ろから、幼い声が聴こえた。
「ボクも連れて行って下さい」
オレンジ色の髪とオレンジ色の瞳の少年、ムムだ。
緊張しているのだろうか? 膝が笑っている。
「・・・・」
「・・・・」
「・・・・」
3人は答えない。
驚いたのだ。 ムムの以外な行動に・・・。
「・・・・好きにしなさい」
ムムも、何も知らない訳ではない。 魔族という強敵を相手にするという覚悟はあるはずだ。
ミーナは、サミーは、リュウは、そう信じてミーナに言ってもら

った。
ミーナの旅だ。　決定権はミーナにある。
「は・・・はい！ボク、付いて行きます！！」
そして、ミーナ一行はムムという新たな仲間を連れて、旅に出たのだ。

STORY9：ミーナの旅（後書き）

ムム…本名：ムム・アインツ。オレンジ色の髪、オレンジ色の瞳。
１４歳。

ＳＴＯＲＹ１０：３年後・刀・新たな敵？（前書き）

非常に、長らくお待たせしました。申し訳ありませんでした。

STORY10：3年後・刀・新たな敵？

-３年後-

ミーナ一行が、魔族を探して裕に3年が過ぎていた。

南に向かって、３年もの間ずっと歩いて来た。　だが、魔族の『ま』の字も出てこない。

ミーナは、割りと落ち着いているが、サミーはイラついていた。

自分の姿を猫に変えたのが、魔族だと知ったからだ。　ま、サミーの勘というものだが・・・。

ムムが、今の身体になった時にあった魔族・ユリークの姿が、サミーが見た奴の格好と似た部分があるからしい。

「がぁぁぁっ！！サ、サミー！ロープ、ロープ！！」

「あ、ゴメン」

リュウの叫び声に、サミーはようやく手を離した。

南へ南へと進み続けて、街や村は無くなってしまい４人はとある場所で休憩していた。

そこはかつて、戦場として使われていたらしい。

所々に、壊された壁や、無数に穴の空いた壁。　弾切れの銃（ピストル）が落ちている。

そう、ここは村だった場所。

そんな場所で、寝転がってそれぞれで考えごとをした。

で、リュウの背中の上で考えごとをしていたサミーが、イラつきのあまり４の字固めをしていたのである。

リュウは、ミーナの腕を掴んで助けを求める。　が、手を振りほどかれ、そのまま眉間を殴られた。

「・・・（怒）」

サミーは、軽くのしかかり痛みが無くなるようにする。

「あはは（汗）。ゴメン、ゴメン」

リュウは、文句をぶつぶつと呟きながら立ち上がった。

どうやら大丈夫のようだ。
伊達に3年間も、ミーナやサミーと旅はしてない。
うんうんと考え込むミーナとは逆に、ムムはぼんやりと考え込んでいた。
ミーナ達と旅をして、既に3年が過ぎているのだ。　いつ、自分が元の身体に戻るのか、不安でたまらないのである。
「はぁ・・・」
青空、少し肌寒い風を身体に受けてムムはため息を漏らした。
その瞬間、ムムの髪がざわざわした。
オレンジ色の髪は、瞬間的に翡翠色に変わった。　最近、新たに姿を見せ出した7人の内の1人だ。
背は高く、腰まで伸びた翡翠の髪が美しい女性だ。
「オージェット？」
その姿に気付いたのは、ミーナだった。
オージェットと呼ばれた女性は、髪をなびかせながら真剣な瞳で3人を見る。
「東・・・太陽の昇る方向から、邪気を感じる」
オージェットがそう言うと、3人は東を向く。　今まで、オージェットが言ったことはよく当たる。　何を隠そう、オージェットは占い師だ。　ミーナよりも力は強い。
彼女の家系は、占い師や予言師の集まりなのだ。　オージェット本人がそう言っていた。
「東・・・？」
ミーナが呟くと、リュウはその先にある街の名を口にする。
「アーランド街か。でも、あそこは聖域の街だろ？街の奴等は気付いてねぇのかよ」

アーランド街。
そこは、聖なる場所。
1番安全な場所だと、どこでも伝えられてきた聖域だ。

そこに邪気を感じると言ったオージェットを疑う訳ではないのだが、やはり、気になる。
「行けばいいじゃん？あたし達には、それしか方法が無いんだし」
サミーは、あっけらかんとして言った。
青空に、薄らと雲がかかった頃、ミーナはコクリと頷き空を見て承知した。

アーランド街。
その門の前に、４人はいた。
今、辿り着いた訳ではない。　数分前に着いたのだが、まだ入れないのだ。
邪気が濃ゆすぎて・・・・。
「駄目だ。近付け無ぇ」
諦めたようにリュウは呟いた。
邪気が漂い、嫌な空気が辺りを包み込んでいる。
人が住んでる様子は・・・・・無い。
と言うより、こんな所に住んでるのは魔族くらいだ。　邪気は、魔族の生きる糧と言っても過言ではない。　その他には、人の悲しみや憎悪など、マイナスな部分がある。
オージェットは、瞳を閉じて両手をかざしてみる。　が、結果は横に振られた首が証明していた。
もうここに、魔族はいないらしい。　代わりにあるモノを見つけたと、彼女は言う。
「これよ」
オージェットが差し出したのは、邪気を帯びた長い片刃刀。　鞘に収まっているが、型からして間違いない。
見たことはなかったが、一応、３人も知っていた。　この世界の者なら、幼い頃に勉強しているからだ。
オージェットが気にしているのは、それではない。

鞘の外側に印されている紋章だ。
『蝶』の・・・・ミーナと同じ紋章である。
「うをっ！？」
その刀を手にしたリュウが、力が抜けた声を出した。
邪気は感じない。　それにも驚いたのだろうが、それ以前に、重いのである。
男のリュウが重いと感じるのだ。
だが、ミーナはそれを軽々しく持ち上げる。
「だらしないわねー。こんなののどこが・・・・って、熱っ！」
ミーナは、自分の腕を抑えて刀を地面に落とした。
それと同時に、刀は地面に数センチめり込んだ。
よく見れば、ミーナの腕の紋章と鞘の紋章が輝いている。
「やっぱり」
オージェットが呟いた。
それに、他の3人が首を傾げる。　訳がわかっていないらしい。
「コレだったのよ。邪気からこの街を守っていたのは・・・・」

4人はひとまず街から数キロ離れることにした。
街を離れるにつれて、刀が帯びていた邪気が薄れていく。
暫くすると、邪気は無くなった。　リュウでも持てるほど、若干軽くはなった。
だが、次の瞬間・・・・。

ガラガラ・・・・ッ！！

3人は、目を丸くして言葉を失った。
今まで、そこにあって確かに見ていた街が・・・・消えた。
「ほらね？あんなに邪気を浴びていて、無事なのは変だったの。この刀が、それを防いでいたのよ」
オージェットは、そらみろ、といったように言葉にした。

「お見事じゃな。お嬢さん」
声がした。
・・・・上から。
聞き覚え、見覚えのあるその人物に、リュウとミーナは声を揃えて人物の名を呼んだ。
「ユリーク！？」
「ジジィっ！？」
すぅ・・・・と開く瞼。　その瞳は闇色、つまり魔族。
４人は、警戒して構える。
だが、警戒は必要無かった。　ユリークからは、サッドの時のような嫌な空気は流れていないのである。
「ついに、その刀を見つけたか。魔王様に報告しなければな」
ユリークは、何やら１人で納得して頷き、姿を消そうとした。
が、ミーナはそれを止めた。
「魔族の目的は何！？わたしに関係してるの？」
ユリークは、髭に暫く触れて考え込む。
そして、ニヤリと笑って答える。
「あるとも言えるが、ないとも言えるのぉ。今は・・・・な」
ユリークは、消えて行く。
その瞬間、ユリークに数本の電撃の塊が貫かれて行った。
翡翠色のブロンドは消え、ボサボサした髪。　ドスの効いた声。
ちなみに、女ではない。
「っざけんＮａ！オレ達を元に戻しやがれ！！」
もう遅かった。
ユリークは既に消えていた。
不適な笑みを浮かべながら・・・・。　ユリークは、消えながら言った。
”トゥルム国で・・・”と。
「勿論、行くんだろぉＮａ？」

頭に青筋を浮かべて、ゴッドが言った。
やはり、便利だとはいえ気にならない訳ではないようだ。
それは、ムム達も同じことである。
ゴッドは・・・いや、ゴッド達はコロコロと入れ替わりながら、文句を呟く。
トイレに行くのが・・・とか、食べ物の好みが・・・とか。
「で？どっちなんＤａ？」
紫色の瞳は、ミーナを見つめて語っていた。
あいつを・・・ユリークを打ちのめしたい、と。
確かユリークは言っていた。”トゥルム国で”と・・・。
ミーナは、碧い瞳で見返した。
ただ、黙って頷き立ち上がる。
そして、歩き出した。
ミーナ自身、気になることだらけだ。
己のこともよく分からない。　それが歯痒かった。
それを知りたいだけなのかもしれない・・・。
「それでも、俺等は進むしかない・・・だろ？」
心を読まれたのかと思った。　ミーナは、目を丸くしてリュウを見た。
リュウは、子供のように笑っていた。
馬鹿の１つ覚えだの、なんだのと好きに言えばいい。
そう言ってるように聞こえた。
空は再び、晴天となる。
ミーナ達４人は、更に東・・・トゥルム国へと足を運び始めた。

「あーぁ、行っちゃった。」
「もぅ、パール兄がグズグズしてるから～」
「うるせっ。いいじゃねぇか楽しみは後からの方が・・・。なぁ？」

「さぁ？どっちでもいいさ。それより、アイツが目を醒ますのも時間の問題だな」
ミーナ達が去った後、茂みに身を隠して話し込む４人の姿があった。
額には、紋章ではなく何かの石が埋め込んである。
この４人が、ミーナ達を苦しめることになるなど、今はまだ誰も知らなかった。
「トゥルム国・・・か。僕達も行こう。僕は、アイツに会いたい」
緑色の石を額に埋め込んだ少年が、瞳を輝かせて嬉しそうに言った。
その瞳の色は、闇色だった。

ＳＴＯＲＹ１０：３年後・刀・新たな敵？（後書き）

オージェット・マックスウェル：女性　水の紋章　翡翠色の瞳、翡翠色の髪　２６歳

ＳＴＯＲＹ１１：再会（前書き）

久しぶりの投稿です。お待たせしました！

STORY11：再会

トゥルム国。
そこは、ミーナ達のいたナルニルァ国から数１０００キロ離れた所にある。
実際、ミーナとサミーは初めて訪れる場所でもある。　リュウは旅人、ムム達の中にいる1人はここの出身らしい。
とにかく、デカイ。
それが2人の感想である。
「・・・。ここにいるのよね？」
ミーナが不安気に訪ねる。
「あたしに聞かれても・・・」
と、サミーは不安気に返事をした。
明らかに困った顔をしていると、サミーの身体が浮き上がった。
首を摘まれ、男らしいしなやかな腕に包まれた。
そして、薔薇の香りが漂った。
「可愛い子猫ちゃん。そんな顔、君には似合わないよ」
そんな、薔薇の香りのように甘ったるい台詞を吐いて、銀髪の青年は微笑んだ。
「・・・は？」
サミーは目を点にして、惚けていた。
なんだ！？　この、恥ずい男はっ！！
と、思っていた。
「誰なんだよお前は」
リュウが、呆れた様子で青年に問いかける。
だが、辺りには既に人集り。　ひとまず、その場から離れることにした。

ここは、トゥルム国1番の安い宿。
だから、人も少ない。
先程の話しの続きが出来る。
「もう1度聞くぞ？お前は誰なんだ？」
ボロいテーブルを4人で囲み、肘を付けて人差し指をピンと立てて、リュウは銀髪の青年に問いかけた。
「私の名は、シューグ。『氷』の紋章を持つ者」
シューグと名乗る青年は、自分が身に付けていた手袋を外して、掌にある『氷』の紋章を皆に見せた。
そして、サミーに向かって微笑んだ。
サミーは黙って苦笑いを返す。
ニコニコと笑っていたと思いきや、真剣な表情になりユリークのことへと話しを替えた。
「で？眠っている間に、色々あったみたいだけど・・・いるの？アイツ」
サミーに見せた甘いフェイスとは逆に、その瞳はアイツ（ユリーク）を睨み付けていた。
自分の身体で最後に見た、アイツの姿を・・・。
早速、ご飯を食べながら、いるんじゃない？、とミーナは答えた。
「本当に思っているのかい？疑いたくなるよ」
「それは、あなたの考えでしょ？今のはわたしの考えよ」
なるほど・・・、とシューグは答えた。
と、そこに声が聞こえた。　外からのようだ。
こんな所に来るのは、物好きかごろつきくらいなものだ。　4人は、警戒しながら誰もいないカウンターの後ろに隠れた。
じっとして騒ぎになるのが嫌だっただけだが・・・。　とにかく、今は厄介事からは身を引いておいた方がいい。
「姉さーん！いい場所があったよー！！」
まず聞こえたのは、幼い少年の声だった。　その後に続いて、美しい女性の声が聞こえる。

どちらも聞いたことのある声だ。
リュウがカウンターから顔を出し、声の主の姿を確認する。
「きゃあっ」
「大丈夫ですかな？さ、ワシの腕に捕まりなされ」
女性の声の後に続く爺臭い青年の声・・・。　３人の脳裏に『まさか』と、ある人物の姿が浮かぶ。
「おぃ」
と、シューグを引っ込めて現れたゴッドが小声でリュウを呼んだ。
「あれ、まさかアイツ等じゃ無ぇよＮａ？」
そう聞きながらゴッドも覗いてみる。
少年の姿はギリギリ見えないが、女性と青年の姿は見えた。
申し訳無さそうに微笑む女性の腕を掴み、鼻の下を伸ばしながらエスコートする青年。
桃色の髪の女性と、クルンとした前髪の青年・・・。
その正体が分かった瞬間、リュウとゴッドは同時に飛び膝蹴りを食らわせた。

そこは古びた教会。
「ほぉ、それはワシが悪かった・・・と、言っておこう」

ゴチッ！！！

『悪いに決まってんだろぉが！』
シェラは困った顔をしながら、それ以外の者達はそれぞれ硬い拳を作りパオの頭を殴った。
「で？シェラ達はなんでここに？」
パオを散々ボコボコした後、ミーナはシェラに問う。
はい、とシェラは今までのいきさつを話し始めた。

それは、今日から調度2年前・・・。
シェラは、何時ものように家事をこなしていた。
シュラも、ヒョウも、捕まったままのパオも。
何時もと変わらぬ時間を過ごしていた。
だが・・・。
「いやあぁぁっ！！」
その悲鳴は、3人の男達の耳に届いた。　紛れも無く、シェラの悲鳴である。
3人がシェラの下へ辿り着いた時にはもう、彼女の周りを闇色の何かが覆っていた。
シュラには見覚えのある光景だった。　他の2人に逃げるように言うが、駄目だった。
最強の紋章とは何か？
シュラがいきなり聞いて来た。
2人は答えられなかった。　そんなこと、誰も思ったりしないからだ。
そんな2人にシュラが言った。
「僕は、姉さんの・・・『蝶』の紋章だと思ってる」
シュラがそう思うのも無理は無い。　そもそも、『蝶』とは”新しい始まり”とか”幻”等々、自分の中に隠れた何かを示すものなのだ。
シェラを覆っていた闇色のソレは、球となって空に浮かんだ。
もう・・・止められない。
シュラが言った瞬間、闇色の球は弾けた。
現れたのは、銀の瞳の翼を着けたシェラ。
「誰だ・・・。私の眠りを妨げるのはっ！」
銀の瞳は、すぐにシュラを睨み付けた。　久しいな、と声をかけて。
シュラは知っていた。

目の前にいるのが、シェラ自身だということを・・・。
「ユーリ・・・」
そして、”ユーリ”という名のもう1人の自分に身体を乗っ取られていることも。
彼女の左腕には、逆さの『蝶』の紋章が・・・。
シュラの紋章が、金色に輝く。
まるで、共鳴しているようだ。
「ほぅ、私の眠りを妨げるのは貴様達ではないようだ。もっと遠くから感じる・・・」
ユーリは、シュラに告げた。
『東へ進め。久しき友とこの世の闇を祓うために』
それだけ言って、ユーリは再び眠りに帰った。　彼女がシェラの中から消えることはない。　ただ、またシェラの中で休むだけだ。
シュラは、動じない。　そんなことは覚悟のうえである。　もう何年もユーリとは付き合ってるからだろう。
そして、時間は過ぎ、事情を説明しよう。　と、シュラが言った。
目を醒ましたシェラは、取り敢えずヒョウとパオに謝った。
ようやく状況を理解した2人は、シェラやシュラに付いて行くことを決心した。

「と、いう訳です」
話しが終わった。
辺りは暗くなり、夕食を皆でつっついて食べた後だった。
シェラの話しに、リュウは恐怖の色を隠せなかった。
「ユーリの奴、なんか企んでるんじゃ無ぇのか？」
それは無いと思う、とシュラが言う。　経験上、彼女が自分に危害を加えたことは無い。
ただ、暴走していなければ、の話しだが・・・。
「で、あんたはいいの？そんなに軍から離れちゃって」

ミーナは、少し眠り被っているパオに尋ねた。
パオは肩をすくめて、苦笑して答えた。
いかなる事情があるにせよ、軍から離れることは許されることでは無い。　つまり、パオは軍を辞めたのだ。
もう済んだことだ、とパオは笑った。
話は盛り上がって、思い出話になったころ、後ろから声がした。

ＳＴＯＲＹ１２：ヴィルド兄弟（前書き）

感想・評価　待ってます！

STORY12：ヴィルド兄弟

「こんな所に何の用だ？ここはオレの寝床だぜ」
後ろから聞こえたのは、さばさばとした青年の声だった。
全員が後ろを振り向くと、紫色の髪に闇色の瞳の、如何にも怪しい旅人が立っていた。
耳は尖ってるし、牙も生えてる・・・。　爪も、ナイフのように鋭利だ。
よっこいせ・・・！と、青年が荷物を降ろすと全員が攻撃を仕掛けた。
「！？」
青年は、人離れした動きでそれぞれの攻撃を全て避けてみせた。
その姿に、皆が同時に驚いた。
明らかに人間とはかけ離れたその動き、冷静さ。　皆が同時に思っていた。
目の前にいるのは、人間ではない！
幻術をスキルに持つ魔獣、もしくは・・・。
「はあっ！！」

ガキィ・・・ン！！！

パオの勢いよく振り下ろされたスピアは、硬い音を響かせて宙を舞った。
（※スピア：魔力を秘めたレイピア。使い手の力と比例した攻撃が可能）
青年は止めた。　己の腕で・・・。

「なっ！？」
明後日の方向に飛んで行くスピアを見て、パオは驚きの声もまともに話せなかった。
生身で止めたはずなのに、その腕からは血の一滴も流れない。
「いってぇ。何しやがる・・・そんなにココで野宿したいのかよ？」
青年は面倒そうに言う。
今までの奴等とは何か違う。　そう思ったミーナが口を開いた。
「魔族・・・じゃないの？」
はぁ？と、青年は目を丸くした。
そして、吹き出して笑う。
「あっははは！魔族？オレが？冗談だろ！！」
最後には腹を抱えて笑いを堪えていた。
どうやら違うらしい。　そう気付いたのは、青年の笑いが終わった頃だった。
青年は、己の素性を話し始めた。
「オレの名前はガイ、年齢（とし）は２０歳。男。まず、オレは人間じゃねぇ」
分かってる、と皆が頷いた。
ガイは話しを続ける。
「オレは人間ではないが魔族でもない。今では滅んだと言われている種族の末裔だ。魔族の存在を知ってるなら、頭の隅っこくらいにあるだろ？”竜人族”ってのをさ・・・？」
ようやく皆は気付いた。　この世の生き物の中には、瞳で見分けることが出来るらしい。
人間ではない者の瞳は、闇色になるのだ。
竜人族のように、人間とは見た目も違う者達の瞳も闇色・・・いや、黒色に近いのだと言うガイ。
「後、闇の紋章を持つ者だ。まぁ、闇つっても元々は竜（ドラゴン）だから、『竜』の紋章と変わりは無いけどな」
ほら、とガイはミーナを指さして、コイツと一緒と笑って言った。

皆は勿論、本人でさえ驚いている。
自分の右腕に、ガイと同じ紋章があるという話にだ。　信じたくはない話。
「知らなかったのか？黒色の紋章は『闇』を示す。こんなの基本だぜ？」
そう言った後、ガイは1人で納得したように頷いた。
彼がこの基本を知った時、まだミーナ達はこの世に存在していなかった。
皆の親、祖父母、曾祖父母さえこの世にいなかったのである。
竜人族は、ドラゴンと人間の神々が造り上げた神聖なる生き物。
人間よりも寿命は遥かに永い。　先程、ガイが２０歳と言ったが実際はそうではない。
人間として見ればそのくらいだが、竜人族としてはその数１０倍の年齢となる。
つまり、何が言いたいのかというと、ガイの言う”基本”は時代の流れと共に薄れていってしまったのである。
「ま、気にすんな。そんなことで魔族になったりはしないから」
不安気な顔のミーナに微笑んでガイは言った。

夜が明けた。
この国に来て2日目、新たな仲間（？）ガイを連れてミーナ達は街を散策していた。
空は晴天。　そこに薄い灰色の雲が太陽を隠している。
涼しげな風が、街中に漂っているようだ。
そう、この国は風の都。　一年中、涼しい風が漂う国。
ミーナ達が寝泊まりした場所も、昔は聖域だった。　清らかな風が、ミーナ達の旅の疲れを癒してくれた。
「うっそみたい・・・。疲れが残ってないなんて、久しぶりじゃん？」
ガイの頭の上でサミーが言った。

ガイは、だろぉ?、と嬉しそうだ。
暫く歩いていると、先頭にいたガイが足を止めた。
「どうしたの?」
ミーナが聞いた。
ガイは眉間のシワを中心に寄せて、辺りを見回していた。
その後ろを付いて来ていた皆も不思議そうに首を傾げる。
「臭うな」
「あ、悪ぃ・・・」
「いや、そっちじゃない。魔族の臭いだ」
『なにぃっ!?』
一斉に背を向けあい、円陣を組む。　敵がどこから来ても対応出来るようにだ。
どこからか、気付いたか、と声がした。
ユリークの声ではない。　それよりもっと若い声だ。
「俺達からは逃げられないぞ?」
そう言って現れたのは、額に真珠を埋め込んだ青年だった。
見るからにチャラチャラした格好のヤンキー（死語）。
青年は、ミーナとガイの間に現れた。
「俺、パール。魔族から生まれた魔族だ。おじいに頼まれてな、アンタ等の邪魔をしに来た」
青年・・・パールは淡々と語った。　嘘だとは思えないが、ミーナには気掛かりなことがあった。
それは、パールが姿を見せる前に言った言葉。
「ねえ?さっき”俺達”って言ってたわよね?・・・仲間、いるんでしょ?」
パールは、呆気に取られて目を丸くした。　感心してように呟くと、彼の後ろから声が聞こえた。
それは、パールを”兄”と呼ぶ若い少年少女の声だった。
同時に違うことを言っているために、あまり良く聞こえないが、取り敢えずパールを怒っているらしい。

「・・・ったく、困った兄貴だぜ」
「ルビー、口が悪いぞ」
暫くパールを怒鳴り付ける声が続いて、２人の魔族が降りて来た。
右耳に赤い宝石を埋め込んだ少女と、左耳に青い宝石を埋め込んだ少年の２人である。
赤い宝石の少女はリュウの目の前に、青い宝石の少年はシェラとシュラの間に。
そして、１番小さな少年がムムの目の前に現れた。
「我々は、ユリークから生まれた魔族。彼等からは”ヴィルド”と呼ばれている」
（※ヴィルド：この世界の宝石の名称みたいなもの）
ムムの目の前に現れた少年が、瞳を閉じたままで語った。
片目を開けて、オレンジ色の瞳を闇色の瞳で睨んだ。
ムムも負けじと睨み返す。　が、既に気迫で負けている。
「先程は兄が失礼しました。右が１つ上の兄のサファイア、左にいるのは姉のルビー。お見知り置きを・・・」
そう言って、少年は瞳を開けた。　魔族の闇色の瞳の隣には、緑色の宝石が埋め込まれていた。
ムムのオレンジ色の瞳に、緑色の宝石が映った。
少年は自分の名も名乗らず、ヴィルドの目的を語り始める。
少年とは思えない程、丁寧で上品な言葉使いで、長ったらしい台詞をズラズラと並べる。
彼等が伝えたいことは先程パールが言ったように、ミーナ達の邪魔をすることらしい。
「で、どうするつもり？」
ミーナは恐れの無い発言をすると、１つ溜め息を吐いた。
邪魔した所でユリークがどこにいるのかも分からないのだ。　これ程疲れそうな駆け引きは無い・・・。
取り敢えず、ココは”邪魔しないで！”等と口にしていた方がいいのか・・・？

「取り敢えず、あなたの名前を教えてくれる？」
敵意を感じさせない笑顔でミーナが言った。
少年も、ニコリと微笑んでミーナに向かって名乗った。
「申し遅れました。私の名はエメラルド。ヴィルド兄弟の末っ子です」
「なんか文句でもあんのかよ」
ルビーが言った。
女性とは思えない口の悪さに、ミーナも気が引けた。
そんなルビーに、エメラルドはＳＴＯＰをかけた。
「でも」
「黙れと言ってるんだ。それとも、私の言うことに背くつもりか？」
彼女はそれ以上、口を開かなかった。
その光景を見て、ミーナはなるほど・・・、と呟いた。
兄弟だからといって、長男がリーダーという訳ではない。　いくら歳が違うからといえど、『力』には適わないのだ。
姉であるルビーが、弟であるエメラルドに口答えが出来ないことも、そのことに口出し出来ない兄達のことも、それで納得がいく。
つまり、エメラルドがヴィルドのリーダー。
「さて、我々は貴方達の邪魔を任されてる」
先程の殺気は消え失せ、エメラルドは微笑んで話し始めた。
途中まではユリークにこき使われた嫌な思い出を話していたが、徐々に雰囲気が変わっていく。
それは、皆が気付いた。
「私も、兄弟達も、これ以上奴の言いなりは御免だ。だから・・・」
ボゥゥン！！！
「殺ったか・・・？」
サファイアがポツリと言う。
エメラルド達が囲んでいたはずのミーナ達は、塵も残さず消え去

っていた。
「・・・いや、逃げられた」
ルビーが地面に触れて言った。
悔しがるルビーを隣に、エメラルドは面白い、と笑っていた。

「ここまで来れば大丈夫だろ」
大人5人程度なら余裕で入るくらいに拡げられたガイの翼。　そこにミーナ達はいた。
エメラルドの急な攻撃に反応したガイが、己の翼を盾にして皆を守ったのだ。
「あ、ありがと・・・」
「助かった～」
ミーナとリュウだけが口にした。
他の皆は、恐怖で言葉を忘れたように黙ったままだ。
小さくとも、魔族は魔族。　あの呪文を聞いた瞬間の、エメラルドの冷たい瞳は、言葉を喋れる3人以外を凍りつかせたのだ。
「大丈夫。ここは聖域だ汚れた魔族は入れねぇよ」
このガイのことばが、皆の恐怖心という絡まった鋼を、スルッと解いた。
一瞬にして、皆に生気が戻って来た。
「い、いい加・・・減にぃ」
ムムの声が次第に大人びている。　軽い口調・・・。
「し・ろ・Ｙｏ～！！！！」
癖のある語尾。　ゴッドだ。
ムムの髪と瞳の色が変わってきて、叫ぶような形でゴッドと入れ替わった。
ゴッドは息を切らして、肩を上下に揺らしていた。　余程、入れ替わるのに一生懸命になったのだろう。

イマイチ、ムムの精神はよく分からない。
「ヴァ～！・・・やっと出られた」
ダルそうにするゴッドは、人間じゃないガイを見ても普通に挨拶を交わしていた。
ムムの中で聞いていたのだろうか・・・？　でも、実物を見るのは初めてのはず。
驚きもせず、見物視しない。
ゴッドのいい所だ。
「とにかく、これで俺達にも敵が出来たってわけだ」
冷静になって、リュウが言った。
ミーナ達は巻き込まれていく。『運命』という名の定められた旋律に。
これがまだ、序の口だということも知らずに・・・。

「随分と勝手な真似をしてくれるじゃないか、なぁ？ユリーク」
どこかも分からぬ闇の中。　やはり、例の男が墓石の前で呟くように話していた。
ユリークは返事をする様子もない。
「上の者に逆らうとはな・・・。対した度胸だ、やはり親に似るのだな」
男は1人で話している。
勿論、ユリークに向かってだ。　ただ、ユリークは返事をしないのである。
後ろから、水滴の音が聞こえてくる。
暗くてよく見えないその空間に、壁に寄りかかるユリークの姿がある。
「ヴィルド兄弟の始末は任せろ。・・・と、言ってももう聞こえはしないか」

散々話した男は、ユリークの方を見て笑った。
同じ方向から、先程の音が聞こえる。
壁に寄りかかったユリークの足は、宙に浮いていた。　水滴の正体の色は、紅い。
「このデスが、奴等を招き入れよう。我が父のために！！」
一瞬、男・・・デスの前にあった墓石が動いたような気がした。
怪しげに笑う、デスの声が辺りに響き渡った。

ＳＴＯＲＹ１３：ちらつく影（前書き）

感想・評価　待ってます！

STORY13：ちらつく影

「さあ、行きましょ」
太陽が真上に来た頃、ミーナが荷物を担いでそう言った。
ゴッドとパールの闘いから、そんなに時間は経っていなかったのだがミーナは急いだ様子を見せていた。
リュウとサミーが続いて歩き始めるのを、他の皆は呆れた様子で見つめている。
「おい？オレ、回復終わって無いんだけど？」
その辺に生えていた薬草を頬張りながらゴッドが言った。
勿論、薬草はミーナが見付けて来た物だ。
ガイも、やれやれ、と歩き始め肩を竦めた。
「知ってるわよ。でも、行かなきゃムム達の身体はそのままなのよ？」
でも・・・、と出し惜しみしているゴッドにガイはこう告げた。
「だから、お前は後ろで待ってればいいんだよ」
そして、笑った。
「・・・って、ミーナがさっき呟いてたぞ」

ベシッ！

ミーナはガイの頭を叩いて、また前に歩き始めた。
まるで、”余計なこと言わないでいいの！”と言わんばかりに。
大して痛くないが、頭を擦って後を追いかける。
結局、リュウを先頭にミーナ、サミーとガイ・・・と続いて皆前に進んで行った。

林を抜けて行くと、腕を前で組んで待っているルビーの姿が最初に目に写った。
額には青筋が浮かんでいる。
「遅い！遅すぎだアンタ達！！」
ルビーはそう言って呪文を唱えた。
右耳の赤い宝石に触れ、光を放ち1本の太刀を手に取った。
それは、赤く『太刀』と呼ぶには細すぎるもの。
だが、長く、ルビーの身長を遥かに超えていたのだ。
「まあいいさ。さあ！相手をして貰おうか！！」
その台詞と共に、ルビーの瞳が表情が変わった。
リュウが構えるが、その後ろから別の声が聞こえた。
何時の間に現れたのか、ミレイから身体を入れ替えたヒューゴが姿を見せていた。
「某が相手をしよう」
そう言って腰の剱に手を掛ける。
朱色（あけいろ）の瞳が、ルビーを捕らえた。
面白い、とルビーは笑い足下を蹴る。
鞘から抜いたばかりの剱で、ルビーの前進を止めた。　ルビーがいた場所、そこから随分離れていたはずのヒューゴの懐に、赤い太刀がキラリと怪しく輝いた。

STORY13：ちらつく影（後書き）

シューグ：本名　シューグ・ナ・ベロール　男　氷の紋章　２０歳

ミレイ：本名　ミレイ・ロナ　女　水の紋章　１７歳

ＳＴＯＲＹ１４：第１の刺客（前書き）

感想・評価　ヨロシクお願いします！

STORY14：第1の刺客

「よぅ」
瞼をゆっくりと開いたのは、金色の瞳をした男だった。
ユーリと同じく、ミーナの中に住むもう1人の人格。
男はユーリを見て、ニヤリと微笑した。
「俺様の他にも、同じようなのがいるとはな！」
「驚いたのはこっちもだ」
そして、何故か闘いの構えに変わる。
金色の瞳と銀色の瞳の間に火花が散る。
「まあ、待て」
と、ガイが間に入って言った。　そのガイを睨み、2人は構えを解いた。
取り敢えず、自己紹介が先だろう？とガイが言うと男が先に話し始めた。
「俺様の名はジェイド」
年は・・・、と語り始める前にリュウが話を遮った。
「なあ？何でそんな目してんだ？」
リュウの疑問は、2人の瞳についてだった。
彼等の世界に、瞳が金や銀といった色になることは存在していなかった。
初めて見たその美しい瞳の色に興味が湧いたのだろう。
「まさか、魔族なんてことは・・・」
リュウの半信半疑な質問に、2人は揃って首を傾げた。
「んな訳」
『魔族だぞ？』

リュウが自ら否定しようとした瞬間、２人は口を揃えた。　一瞬にして、その場の空気が凍り付く。
あ、ガイは除く。
その他のサミー、パオ、リュウの３人はそのガイの後ろに下がっていた。
「私の名はユーリだ。シュラやヒョウとは久しぶりだな」
そんなことはそっちのけで、自己紹介の続きが始まった。
ジェイドもユーリも、暴れる気は無いらしい。
見た目は若いが、彼等は既に５世紀は生きているらしい。
ジェイドに至っては、裕に７世紀は超えているのだという。
ここで皆に疑問符が浮かんだ。
ミーナやシェラの年齢と数が合わないということだ。
「俺様達は、死ぬ前に転生を繰り返すのさ。この瞳はその証。俺様の場合、魔族にも転生したからこんな色だがな」
と、ジェイドが笑って説明した。
魔族の転生者が、魔族に転生した場合その瞳は金色に変わる。
魔族の転生者は、いや、転生者事態この世界には珍しい。
だから大抵の人間は、金色や銀色の存在が分からないのだ。
とにかく、これで面子は揃った。　後は、敵陣へ乗り込むのみ！

「来たか・・・！」
暗闇の中で男が言う。
目の前には墓石、ヴィルド兄弟を背にして、とても嬉しそうに。
ヴィルド兄弟は男を目の前にして、片膝を付いている。
「貴様達に、改めて命を下す」
男いや、デスは急に冷めた瞳と言葉を、ヴィルド兄弟に向けた。
その瞳にびびって、兄弟は目を反らす。
デスはそのまま告げる。

兄弟もそのままで聞いた。
「分かったな？では行け！」
『はっ！！』
兄弟達は一瞬にして目の前からいなくなった。
デスは再び墓石を眺めた。
ガタガタ、ガタガタと揺れる墓石。
刻まれた主の名は未だに読み取れない。
そんな墓石を、いつまでも憧れる瞳で見つめていた。

一方、ミーナ一行は入口と思われる森の手前で休んでいた。
ジェイドとユーリは、それぞれの身体へ戻り、命に関わる時に手を貸すことを約束してくれた。
これで勝機が見えてきた。
「おい？いつまでその姿なんだ？」
『ん？』
近くの別の森で取って来たガイルラット（ミニブタくらいの鼠、魔獣）を数匹、薄暗い空の下で焼きながらリュウが聞いた。
もう辺りも暗くなり、突入するのは明日にしようと決め、あれから裕に3時間は経っていた。
が、焼けたガイルラットの肉を頬張って一言でしか返事出来なかった2人はまだ、ユーリとジェイドのままだったのだ。
はて？
今確かに、それぞれの身体に戻ったはず・・・。
今から数分前、それぞれが戻った瞬間、それは拒否された。
理由は、ミーナとシェラが眠ってしまったから、らしい。
「ま、明日の朝には戻ってるさ」
ムシャリ、と骨の周りに付いた肉を引き割いてジェイドは言った。
リュウ本人も、そっか、と軽く流す。

乗っ取られなければ問題は無い。　そう思ったリュウは食事を終えるとすぐにどこかへ行ってしまった。
その後を付いてユーリも歩いて行った。
他の皆も、それぞれで休んでいる。
今、その場で起きて活動しているのは、ガイとジェイドだけである。
パチパチと燃える薪を見つめて、静かな口調でガイが話を切り出した。
「５００年前のこと、憶えているか？」
５００年前。　つまり、ガイが約３歳の頃だ。
ジェイドは何も答えず、ただ薪の弾ける音だけが聞こえた。
やがて、決心したかのように、ジェイドは重い口を開いた。
「・・・あぁ」
ジェイドは沈んだ声を出す。
「じゃあ、オレを見て何も感じなかった訳じゃないだろ？」
ガイの真剣な口調と視線はジェイドに刺さった。
ジェイドは再び、ああ、とだけ答えた。
ガイは、目に薄らと涙を溜めて”じゃあ・・・”ときり出した。
が、それをジェイドは止めた。
「分かってるさ。謝って済まないこともな」

そして、夜が明けた。

森に入って数時間。
リュウとパオの嘆きが聞こえた。
『つ～か～れ～た～』
うるさいな～、とミーナが呟き、ガイが笑い、皆が同時に笑った。
その場は一瞬にして消え失せた。
額に真珠を埋め込んだ、陽気そうな青年が・・・パールが待ち構えていたのである。

「やっと来たか」
パールは、まるで楽しみにしていたように言った。
笑みを創る、その真っ黒な瞳をミーナ達は睨むように見つめる。
「じゃ、始めましょか！」
そう言って突っ込んだ先は、先程まで欠伸をして気の弛んでいたゴッドだった。
驚いたように、剱を躱す。
ゴッドは文句を言うが、再び攻撃は繰り返された。
呪文を唱えることもままならないのだ。
「メリット・サンダー！」
ゴッドは、苦し紛れの呪文を口にした。
丁度、人の握り拳程の小さな火の粉の集まりだが、威力は凄いモノだった。
一瞬のうちに、パールの髪に燃え移っていた。
必死になって髪の火事を消すパール。
消し終わった彼の目付きが変わった。
「あまり、怒らせんなよ～？」
先程より増して、殺気が強くなる。
キラリ、と一瞬だけ光りその一瞬で、ゴッドの視界は真っ赤に染まった。
躱したのだが、剱はゴッドの右目の瞼を割いていた。
鮮血が流れ、ゴッドの右目の視界を赤く染めてしまう。
「しまった！」

ガツッ！！！！

そのことに気を取られ、パールが迫っていることに気付かなかった。
気付いた時には、ナックルを装備したパールの右手が目の前にあったのである。「卑怯者（ひきょうもん）！」

怒りの言葉を馬鹿にするかのように、パールは子供のようにチラリと舌先を見せて笑った。
「ふざけやがって！ディルバーストぉ！！」
苛ついたリュウが、パールめがけて呪文を唱える。　が、それは綺麗に消え失せてしまった。
リュウの放った、ディルバーストはちょっとやそっとのことでは破壊されることはあり得ない呪文。
”最強”とまではいかないが、それなりに強力な呪文である。
それが、意図も容易く消え失せてしまったのだから、リュウはショックを隠しきれていない。
リュウの絶望的な表情に、パールは笑った。
「無駄だぜ？俺を中心に半径１０フィル（メートルと同じ）は物理攻撃も呪文も吸収しちまうぜ」
パールはニヤリと笑みを見せ、リュウに礼を言った。
言われた本人は気が付いた。　あの呪文を、吸収されてしまったのだということを・・・。
そして、パールの左手に炎が集まり始める。
呪文は必要無い。
なんせ、それは元々リュウが放ったモノだからだ。
ただ、吸収したエネルギーをそのまま自分の左手に移しただけである。
「ディルバースト・改！！」
パールはそう叫んだ。
無数の炎が、ゴッドに向かって巻き付くように走る。
人間同士に相性があるのと同様に、呪文・紋章同士にも相性がある。
リュウの『竜』の紋章と、ゴッドの『雷』の紋章はそれほど悪い相性ではない。
どちらも、元を辿れば『火』の紋章から生まれたものだからだ。
他の紋章、例えば『鳥』の紋章の人物よりはダメージは少ない。

だが、次の瞬間、ゴッドの叫びがミーナ達の耳に届いた。
「がああああぁぁぁ！！！！！！！！！」
その叫びが終わったのと同時にゴッドの身体は崩れ落ちた。
「まだ生きてやがる。悪運の強い奴だ」
パールはそう言って、左手を下ろし右手を上げた。
真珠がびっしりと付けられたナックルを、ゴッドの頭上で右手に身に付ける。
止めをさすつもりだ。
ミーナ達が思った瞬間、再び苦音の叫びが聞こえた。
倒れているゴッドではない・・・。　止めをさそうとしたパールの声だ。
「テメェ・・・！やりやがったな！？」
一瞬が速過ぎてよく分からなかったが、ゴッドはパールにダメージを与えていた。
パールを見れば、右手の指に赤い血が流れている。
それは、重力に従い純白な真珠を赤く染め上げる。
両手を付いて、苦しそうに顔を起き上げる。
その表情は、悪戯を仕掛けた少年のようだ。
「へ、へへ・・・。魔族の肉ってのは、不味いもんだＮａ・・・」
ゴッドはそう言って何かを吐き出した。　べちゃっ！っと、赤いそれは地面に落ちる。
それと同じくらいの大きさの傷。　抉れた腕。
『それ』は、パールの肉。
「中にいる奴なら、攻撃可能なんだＲｏ？」
ニヤリ、と笑ったゴッドはゆっくりと起き上がった。
ダメージは、ほとんど感じられない。　あの呪文はやはり、ゴッドには効いてないらしい。
闇の力が加わっても、ゴッドには通用していないようだ。
「死ね！サンダー・スネイル！！」
パールが自分の腕に気を取られている隙に、ゴッドは呪文を唱え

た。
ゴッドによって生み出された雷は、蛇のように螺旋を描いてパールに巻き付く。
雷のせいで、身体が痺れてしまい思う様に動かせない。
最期には、蛇の姿を浮かび上がらせた雷は、大きな口を開けてパールを飲み込んでゆく。
「や、やめ・・・！」
半分悲鳴、半分叫びに聞こえたパールの声は、いつの間にか聞こえなくなっていた。

「・・・ド？・・・ゴッドってば！？」
疲れ切って、その場に倒れこんだゴッドにグーパンチが飛んできた。
ゴチッ！という、痛そうな音が響いた。
「いい加減、起きなさいよ！！！」
痛みと傷みに耐えながら、ゴッドは叫びにならない叫びを出していた。
声の正体はミーナでもなく、サミーでもない。　かといってシェラでもなかった。
彼の目の前にいたのは、ミレイだった。
ここは、ムムの精神の中なのか？とゴッド自身も疑いたくなる程に・・・。
「あれ？なんで・・・Ｄａ？」
ゴッドは、何かを確認するかのように手を握ったり離したり、を繰り返す。
瞳を確認する。
近くにあった水溜まりに顔を覗かせて、見てみた。
紫色だ。
ちゃんと、両方とも・・・。

これが意味しているのは1つだけ。
「戻ったぁーーー！！！！！！」
ゴッドは、両手を天に突き上げて喜んでいた。
ムムの身体、精神から1人消えた。
最初がゴッドだったのが気に入らないのか、ミレイはまた、ゴッドに拳を振り落としたのだった。

ビシッ！！！

「ほぅ・・・。パールを倒したか」
デスが言った。
墓石に『D』の文字が記される。
部下が倒れたというのに、デスは未だに墓石を見つめている。
その墓石に向かって何かを呟く。
ただ、嬉しそうに見えた。
一方、その頃ミーナ達は・・・。

「いつまでも浮かれてんじゃないよ！？」

姿は見えず、ただ、ルビーのハキハキとした声だけが聞こえた。
兄が倒れたのにも関わらず、平気な口調で話してくる。
「さっさと回復して挑んで来な！奥の方でまってるぜ！！」
ヴィルド兄弟は、1人ずつで向かって来る・・・いや、ミーナ達を待っているようだ。
もう、後には引き返せない。　胸にそう言い聞かせて、ミーナ達は覚悟を決めたのであった。

STORY14：第1の刺客（後書き）

ヒューゴ：本名　ヒューゴ・サカキ　　21歳　男　自己流剣術

『水』の紋章

ＳＴＯＲＹ１５：第２、第３の刺客（前書き）

ヒューゴの自己紹介の時に書き忘れがありました。　彼の瞳の色はネイビーです　　感想・評価　お待ちしております！

ＳＴＯＲＹ１５：第２、第３の刺客

「さあ、行きましょ」
太陽が真上に来た頃、ミーナが荷物を担いでそう言った。
ゴッドとパールの闘いから、そんなに時間は経っていなかったのだがミーナは急いだ様子を見せていた。
リュウとサミーが続いて歩き始めるのを、他の皆は呆れた様子で見つめている。
「おい？オレ、回復終わって無いんだけど？」
その辺に生えていた薬草を頬張りながらゴッドが言った。
勿論、薬草はミーナが見付けて来た物だ。
ガイも、やれやれ、と歩き始め肩を竦めた。
「知ってるわよ。でも、行かなきゃムム達の身体はそのままなのよ？」
でも・・・、と出し惜しみしているゴッドにガイはこう告げた。
「だから、お前は後ろで待ってればいいんだよ」
そして、笑った。
「・・・って、ミーナがさっき呟いてたぞ」

ベシッ！

ミーナはガイの頭を叩いて、また前に歩き始めた。
まるで、”余計なこと言わないでいいの！”と言わんばかりに。
大して痛くないが、頭を擦って後を追いかける。
結局、リュウを先頭にミーナ、サミーとガイ・・・と続いて皆前に進んで行った。

林を抜けて行くと、腕を前で組んで待っているルビーの姿が最初に目に写った。
額には青筋が浮かんでいる。
「遅い！遅すぎだアンタ達！！」
ルビーはそう言って呪文を唱えた。
右耳の赤い宝石に触れ、光を放ち1本の太刀を手に取った。
それは、赤く『太刀』と呼ぶには細すぎるもの。
だが、長く、ルビーの身長を遥かに超えていたのだ。
「まあいいさ。さあ！相手をして貰おうか！！」
その台詞と共に、ルビーの瞳が表情が変わった。
リュウが構えるが、その後ろから別の声が聞こえた。
何時の間に現れたのか、ミレイから身体を入れ替えたヒューゴが姿を見せていた。
「某が相手をしよう」
そう言って腰の剣に手を掛ける。
ネイビー色の瞳が、ルビーを捕らえた。
面白い、とルビーは笑い足下を蹴る。
鞘から抜いたばかりの剣で、ルビーの前進を止めた。　ルビーがいた場所、そこから随分離れていたはずのヒューゴの懐に、赤い太刀がキラリと怪しく輝いた。
勢いがあった為か、ルビーとヒューゴの剣の前に火花が散る。
「やるな～。でも、勝たせる訳にはいかないんだよ・・・。」
ルビーがそう言って誰かに呼び掛ける。
ヒューゴの強さと、特徴と癖を告げてだ。
そして、最後にその人物の名を呼んだ。
「2人で殺ろうぜ！サファイア！！」
『やれやれ・・・身勝手な妹だ』
林の木々の間から、物静かな男性の声がした。
暴力的な口調のルビーとは逆に、冷静的な口調でその男は姿を見

せた。
　左耳に青い宝石を埋め込んだ、その宝石と同じ名の男・・・サファイアが、既に青い槍を構えてルビーの隣に立っていた。
「まったく、お前って奴は・・・。ボクの出番は無いんじゃなかったのか？」
「よく言うぜ。出待ちしてたくせに」
　２人は顔を合わせず、目も合わせず、ただ、ヒューゴの方だけを見て会話している。
　会話が進む度に、２人の殺気が強くなる。
　相手は仮にも魔族。
　しかも２人。
　こちらは人間が１人だ。
　勝ち目は無い・・・。
　そこにいる誰もがそう思った瞬間だった。
「ぎゃっ！」
　見た目や口調のイメージをぶち壊すような叫び声が聞こえた。
　カラン・・・、と棒状のものが落ちる音の後に、サファイアが怒鳴った。
「お前ぇ・・・！」
　ギラリと獣のような瞳をヒューゴに向ける。
　青い槍に、鮮やかな血が円を描く。
　目の前のヒューゴは、先程から動いていない。
　周りの者達には、今、何が起こっているのか分からなかった。
「よくも・・・よくもボクの美しい顔に、傷を付けてくれたなぁ！！！」
　そう言ったサファイアは、右手で傷を隠していた。
　そう。　ヒューゴは肉眼では捕らえきれない速さで、サファイアの右頬を切り付けていたのである。
　だが、その傷も次第になくなっていく。
　どうやら、傷が浅かったようだ。

「片手を隠したりなんかして・・・・格好付けのつもりか！？」
傷が消えても尚、サファイアの怒りは修まらない。
ヒューゴは”ふっ”と笑う。
その反応にも、サファイアは怒りの矛先を向ける。
その台詞にも、ヒューゴには笑えるらしく再び鼻で笑った。
サファイアはその後も、ヒューゴの態度と容姿に矛先を向けて怒鳴り続けた。
「某は！！」
サファイアの怒りを静めたのは、ヒューゴの主張だった。
「某は好きでこの格好をしてる訳では無い。こうするしかないのでな」
ヒューゴはいそいそと右手で左腕の部分を引き裂き始める。
ヒューゴの太い腕を余裕で覆う、黒い服の下にあるはずの左腕は姿を見せなかった。
「貴様がそう怒鳴っている間、貴様の妹はボロボロだぞ？」
『くそっ』と声を漏らすルビー。
致命的な傷は見られない。　だが、全身が血塗れだったということには変わりはなかった。
「貴様は某には勝てない」
右手に持った剣を、サファイアの眉間に突き付けて言う。
その挑発にサファイアは乗ってしまった。
ヒューゴの強さは圧倒的。
しかし、片腕の剣師対魔族2人では不利なのは確実だ。
だが、それもまた、急ぎ過ぎた答えだった。
急ぎ過ぎた答えを思い描いていた2人に、痛みが起こった。
剣よりも温もりがあり、剣より厚みが無く、剣よりも高い切れ味をもつ最強のモノ。
しかし、それがあったのは左側・・・。
「舌噛むぞ？さあ、始めようか。闘いを！！」

ヒューゴが言うと、物凄い速さで闘いが繰り広げられた。
本人達に喋る余裕は無い。
ルビーの赤い太刀、サファイアの青い槍がヒューゴを襲う。　それを次々と防ぎ、攻撃を繰り出す。
右手には剱、左手には水で創り出した剱を器用に扱う。
周りにいた誰もが、２人の魔族と１人の人間との闘いを固唾を飲んで見守っていた。
両者共に、相手に傷を負わすことは出来ていない。
だが、先に膝を付いた者がいた。
血を流したまま動き過ぎてしまったのだろう。
赤い宝石の少女、ルビーは息を切らしていた。
そうなった瞬間、サファイアの動きが遅くなった。
「チィ・・・ッ！！」
本人も気が付いている。
原因が何なのかも。
ヒューゴもまた、それに気が付いていたのである。
「やはりな・・・」
ヒューゴは、剱に付いた血を振り落とすと、それをルビーに向けて見せた。
そして、歩いて行く。
倒れたルビーに向かって。
皆にも見える速度で、水の剱を空にかざす。
その真下は、傷ついたルビーの姿が・・・。
「シー・ニードル！！」
ヒューゴは、横から聞こえたその声に反応して避けた。
ルビーの避けの呪文ではない。　声は男の物だった。
相手は１人しかいない。
サファイアだ。
無数の針は、ルビーからヒューゴを引き離すように飛んでいた。

一瞬ながらも、サファイアはその隙にルビーを連れて離れた。
兄を倒されても怯みさえしなかったのに、ルビーとサファイアは動揺している様子だった。
「貴様等がその姿である限り、某には傷1つ付けられんぞ！」
距離を取り、回復を待つ2人にヒューゴが叫び声を上げる。
「サファイア、もうバレてるみたいだぜ？」
「そうだな」
2人がそう言うと、雲行きが怪しくなってきた。
1人で立ち上がれるまで回復したルビー。
サファイアと手を取り合って、何やら呪文を唱え始める。
「「我等、真ノ姿ヲ此処二示サン」」
2人の声が同時に聞こえて、その姿も変わっていた。
いや、戻った、と言った方が正しいのだろう。　2人は元々1人で、それが分かれて行動していたのであれば、先程からの彼等の態度にも納得がいく。
つまり、片方がダメージを喰らうとその影響がもう片方にも伝わって来る。
ルビーが傷付いている間、サファイアの様子が変だった理由がそれだ。
ルビーもサファイアも、それを承知の上で闘っていた。　ヒューゴはそれに気が付いたのだろう。
「「死ねぇ！！！」」
2人が1人に戻った瞬間、ソイツはすぐにヒューゴを狙って来た。
先程と比べものにならない程、ソイツの動きは速かった。
狂暴なルビーの強さに、サファイアの戦慄スタイルの強さが交わっているのだ。
1＋1＝？
答えを2と思った貴方！
正解です。

そう思ったのはヒューゴもであった。
「それならば、某も本気で参る！」
そう言うと、ヒューゴはもう1本剣を手に取って構える。
2＜3
当たり前です。
ヒューゴも同じことを考えていた。
片腕は水だ。
もう1本増やすなんて容易いことである。
そして、ヒューゴは異様な構えを見せる。
水である剣の2本を目の前に、残りの1本の刃先をソイツに向けて頭上にかざす。
「「ヴァイオ・エレキアロー！！」」
赤い雷と、青い雷が放たれ紫色の雷となり、無数の矢はヒューゴに向かって行く。
ソイツの攻撃である。
勝利を確信したのか、ソイツの口元がニヤリと釣り上がる。
それを見て、ヒューゴも微笑を見せた。
「うおぉぉぉっ！！！！」

バチバチバチバチ！！！

くっ、と痛みに耐える声。
音と声に続いて、変な匂いが・・・。
何かが焼けた匂い。
煙は、ヒューゴの肩から上がっていた。
つまり、匂いの正体はヒューゴの肉が雷で焼けるもの。
これ以上喰らう訳にもいかない。
ヒューゴは、3本の剣をアーチの要領でダメージを地面へと流し込んでなんとか逃れることが出来た。

全ての攻撃を地面へ送り終えると、ヒューゴは一瞬にしてソイツの後方に回った。
「某の・・・か、勝ち・・・だ・・・・」
そう言って、ヒューゴは倒れた。
最後のヒューゴの言葉に、ソイツは嘲笑って答える。
下品な笑いが続き、ある者の怒りが頂点まで達した。
呪文を唱え、ソイツに標的を向ける。
体が小さい分、あまり声が出ないその者は、皆の鼓膜が破れる程大きな声で呪文の名を口にした。
「スターアロー！」
額に星の紋章。
そう、サミーである。
攻撃はヒューゴ程効いてはいない。
下品な笑いをただ続けるだけである。
サミーは更に怒り、スターアローを打ち続けた。
集中攻撃していたおかげで、ソイツの顔に傷が付く。
性格はサファイアのままであった。　顔の傷は、ソイツの怒りを買ってしまった。
「ギャハハハハ！！！！」
ソイツは笑ったまま、サミーに向かって呪文を唱え始める。
・・・だが、その先が聞こえなくなる。

キィン！

小さな音がした。
その瞬間だった。
それから、ソイツの声はしなくなってしまった。
ゆっくり、ゆっくりと身体がズレる。
右と左が分かれて、またルビーとサファイアの2人に戻った。
が、2人は2度と起き上がっては来なかった。

『勝ちだ』

ヒューゴは本当に勝っていたのであった。

STORY16：宿敵

片腕の武士の目の前には、赤と青の刺客が血を流し倒れている。
ヒューゴの圧倒的な強さに、手出し出来なかった2人の憐れな姿だ。
2人が融合したその存在は、ヒューゴの剱によって真っ二つに裂かれ、再び分裂して2つの存在が現れた。
最後に攻撃したサミーによるものではなく、融合した存在を通り抜けた瞬間にヒューゴがした攻撃によるものだった。
それを証拠に、彼等が引き裂かれる前に『キィン』という金属音があった。

2人の魔族を倒したのだから、勿論ヒューゴは元に戻った。　そして、もう1人。　最後に攻撃したサミーもまた、人間の姿に戻ったのである。
ヒューゴが（疲れによって）倒れ、また、日が沈みかけている。
皆はまた、休むことにした。
相手は魔族。
ゴッドやヒューゴという負傷者を抱えながら、このまま闘いを続けるのは危険と予測したからである。
「腹が減った。おい、糞巻き毛！メシ取って来い！！」
糞巻き毛・・・基、パオを足蹴にしながら言ったのはジェイドだった。　辺りが暗いせいなのか、彼の金色の瞳はよく目立っている。
「何をするんじゃ！メシくらい己で探せ！！」
「は？」
「スミマセン、行ッテキマス」

珍しく歯向かったパオだったが、やはり、逃げ出してしまう。
ジェイドはリュウとムムにも脅し・・・基、頼むとガイを連れてどこかへ行ってしまった。
怪我しててよかった・・・と、ゴッドやヒューゴは薬草を頬張りながらそう思っていた。

残りの魔族は恐らく3人。
ヴィルド兄弟の末っ子兼リーダーのエメラルドと、その生みの親のユリーク。　そして、忘れているかもしれないが、サッドと名乗り姿を見せなくなったあの魔族の3人である。
皆にも疲れが見える。
特に、1つの身体でダメージを浴び続けたムム達は・・・。
「てなわけだ。奴等もそこを狙って来るだろうな」
皆から離れたガイとジェイドは、暗い暗い森の中でこれからについて話していた。
意外にもしっかりと考えているガイに関心して、ジェイドは”ほう・・・”と声を漏らした。
「で、どーする気だ？」
ジェイドの最もな意見に苦笑を見せるガイ。
何か考えはある様子だが、一時黙ったままだった。
再び、ジェイドが同じ意見を口にすると、ガイは重そうに口を開いた。

「おー、遅かったな。ホレ！メシ、取って来たぞ？」
森の奥から現れたジェイドとガイの姿を見て、パオが爽やかに声を掛けた。
「・・・・」

パオの爽やかな笑顔を無視して、２人は旨そうに焼けた魔獣の肉を取りまたどこかへ行ってしまった。
今度は森の奥ではなく、月がよく見える樹木の上。
２人は無言のまま、月を眺める。　先程までは何もなかったというのに、２人の間に亀裂が入ったように声さえ掛けようとはしなかった。

夜が明けても尚、姿はジェイドのまま・・・。
そして、ガイとの間も離れたままだった。
「現れないな」
苛立ったガイが声を漏らした。　それを、ふっ、と鼻で笑う者がいた。
「仮にも竜のガキともあろうお前が、そんなに苛つくな」
ジェイドであった。
しかも、鼻に付く、と付け加えて言う。
その台詞にガイが更に苛立った。
いつも冷静だったガイのその行動は、ただ、皆を困惑させただけだった。

『仲間割れかい？』

姿は見えずとも、その幼い声ははっきりと耳に届いた。
太陽が眩しく輝き、その明かりに照らされながら、小さな男の子は樹木の上で頬杖をついて笑っていた。
ヴィルド兄弟のリーダー、エメラルドである。
ミーナ達の最年少のシュラよりも若く見える。
だが、やはり魔族。
その冷徹な闇色の瞳がそれを語っているようだった。

ガイとジェイドが再び離れると、止めちゃうの？、と可愛い振って見せる。
「君達敵同士が仲間じゃ、他の人間達も不安だろう？」
一変して、悪魔のような悪い笑みを見せるとそう言ってサミー達を見た。
頭上に疑問符を付けて首を傾げるサミー達。
ガイとジェイドの２人に冷や汗が浮かぶ。
「え、え？敵？・・・誰と誰が？」
額に『星』の紋章がある、ネイビー色のセミロングの髪の少女が困惑の色を隠せないまま言う。
（→サミーです。）
それを見て、エメラルドは嘲笑った。
「知らない！？仲間なのに？」

エメラルドは語り始めた。
５００年前の、ある出来事を・・・・。

魔王がこの世に混沌を散らばす少し前。
ガイがまだ約３歳くらいの頃である。
その頃は、人間も魔族も竜人族も、協力し合って生きていた。
だが・・・・。
「我等、人間は貴様達のような危険な存在とは協力するつもりは無

い！！」
「竜人族の子供が、私の子供に怪我を・・・・！」
「出て行け！」
「出て行け！！」
人間達に”恐怖”が取り付いた瞬間、人間と魔族と竜人族との間に大きな溝が出来てしまった。
それからというもの、人間は光に、魔族は闇に、竜人族は黄昏に・・・と、生きる場所を求めるようになった。
その出来事から数ヶ月。
人間と魔族の間に争いが始まった。
初めは小さな争いだった。
が、月日が経つうちにある問題が発生したのである。
光と闇の闘い。
では、黄昏に生きる者達はどちらの味方なのか。
竜人族は、争いを拒んだ。
それは、人間にも魔族にも就かないということだった。
所謂（いわゆる）、中立、という立場である。
そして、中立という存在は光と闇に争いの火を点けた。
「味方でも、敵でもないなら・・・・！」
「殺せ」
「殺せ！」
「殺せぇ！！」
人間達は魔族から、魔族達は人間から、的を竜人族へと変更した。
竜（ドラゴン）の皮膚は硬く、人間達は歯が立たなかった。
が、魔族は違う。
傷は付かないが、ダメージは大きいのだ。
魔族は自分の分身、手下を自由に作り出せる。　そんな相手に、高齢な竜が多い彼等が勝てるはずがなかった。

「そうだ。俺様はあの時、そこにいたんだ」
エメラルドの話が一段落して、ジェイドが開き直った態度で言った。
金色の瞳が輝いて見える。
「俺様はあの時、竜人族を滅ぼした魔族達の仲間だった・・・」
「ね？敵同士だったでしょう？」
ジェイドなど、気にも止めずにエメラルドは陽気に笑って見せる。
やけに、闇色の瞳が黒く見える。　それだけ面白いと思っているのだろう。

「ジェイドー！！」

少し後ろの方で、ガイの怒りで震えた大きな声が聞こた。
エメラルドとジェイドが同時に声の主、ガイに目を向ける。
今まで、ずっとクールな雰囲気で行動していたガイが怒っている。
ジェイドの正体も知っていて、ずっと平然な振りをしていたためにストレスがあったのだろうか・・・？
ビキビキビキッ！と、硝子に亀裂が入ったような音が辺りに響いて、ガイの姿が人間から遠ざかる。
朱色の鱗が硬そうに光る。
見た目、正に竜人族！
「お前ぇ・・・！あの時の言葉は嘘だったのかぁ！！？」
確かに、ガイとジェイドはあの頃の話をしていた時があった。
”謝って済む話では無い・・・”とジェイドも言っていた。
ジェイドは、ふっ、と鼻で笑って肩を竦めた。
「記憶に無ぇなぁ」
その台詞にガイは怒った。　『竜』の紋章に触れると、呪文を唱え黒いオーラを放つ。
オーラが球体となった瞬間、ガイの手元から離れジェイドに向か

ってまっしぐらに飛んで行く。
ジェイドはそれをあっさり避け、ガイを嘲笑った。
ジェイドの後ろからは何やら文句が聞こえて来るが、恐らく攻撃が当たりそうになったエメラルドのものだろう。
2人はそれに見向きもせずに攻防を続けていた。
「お前だけは、絶対に許さん！！」
「はっ！若造が、俺様に勝つつもりか！？」
再び黒いオーラを球体に変えるガイ。　それに対抗するかのように、闇色のオーラを球体に変えるジェイド。
『闇の竜』対『闇の蝶』。
『竜人族』対『魔族』。
今の今まで文句を言っていたエメラルドも、楽しいのか陽気に笑い声をあげる。
「やめろ！」
「やめて下さい！」
と、リュウ達は止めようと必死だ。
しかし、その努力も虚しくそれぞれの球体は相手めがけて大きさを増し、輝きを増して飛んだ。

音にならない衝撃が、ガイとジェイドを包み、弾けた。
倒れたのはガイ。
経験の差というやつなのか・・・。
無傷なジェイドに対して、ガイの身体は血塗れだった。
左胸を貫かれ、もぎ取られた腕の鱗が辺りで光る。
最早、ピクリとも動かない。
「・・・ふん」
左肩に付いた土埃を払いのけて、ジェイドは満足気な態度を見せていた。
「ガイ！おい、目ぇ醒ませ！！」

リュウやヒョウ、サミーやシェラがガイの名を呼び叫ぶ。
が、返事は無い。
今まで晴れていた空に、蒼い稲妻が走り、ザッ・・・、と雨が降り始めた。
ジェイドの金色の瞳が、碧く澄んだ色の瞳へと変わる。　ミーナが目を醒ましたのだ。
目の前の皆が、絶望的な表情をしている。
「どうしたの？みん・・・・」
言葉と同時に1歩踏み出すと、パチャ、と水溜まりのような音がした。　そこに目をやったミーナは黙ってしまったのだ。
人間ではないが、よく分かる。　昨日まで一緒に闘ってきた仲間だ。

「ガイ・・・？」

STORY17：いざ！決戦へ！！

「ガイ・・・？」

ミーナは、その人物を見下ろした。
身の危険の時は助けてくれた、下からサポートしてくれたその人物を、違う形で見下ろしていた。
何が起きたのか分からないが、自然と涙が頬を伝う。
そのミーナを見て、笑う者がいる。　そいつは、闇色の瞳と共に翡翠色の石を輝かせる。
「泣いちゃった？でも、それ、君がしたんだよ？」
「！？」
エメラルドの冷たい一言が、混乱するミーナの動きを止めた。
碧い瞳を大きく見開いて、ミーナはエメラルドを見た。　そして睨んだ。
「嘘だぁ！！！」
ミーナの背に異変が起きた。
本人が感じる程、熱く、そして何かが生える。
それは羽根だった。
真っ黒な、蝶の羽根。
その辺りに生えている草木や花から、粉のような物体を引き寄せて創った羽根。
異変は、背中だけではなかった。
「こいつ、瞳（め）が・・・！？」
あまりの驚きに、エメラルドは声を漏らした。
「リュウ！火を！！」
今までに無かったミーナの凄みに、リュウは言われるままに火球（ファイヤー・ボール）を渡す。

ミーナはそれを受け取ると、手元にある剣を鞘から引き抜いた。
魔族に焼かれたあの街で手に入れた剣だ。
刃先が怪しく光り、リュウの火球を纏う。
「はあああぁぁぁっ！！！」
ミーナの踏み込みは、１歩だけでエメラルドの目の前まで移動した。
「なっ！？」
エメラルドの注意がミーナに移った。
それを合図に、ミーナは叫んだ。
「今よ！一斉に攻撃して！！」
それぞれが、それぞれの呪文でエメラルドを攻撃する。
エメラルドは、逃げの態勢を見せるが次々に来る攻撃に埋もれてしまった。

暫くして、エメラルドの姿が無くなったのに気が付いたリュウが”ＳＴＯＰ”の合図を出す。
「・・・やったな」
ホロリと、リュウが言う。
ミーナは涙を流したまま、立ち尽くしうなだれる。
「ミーナ」
それを見兼ねたサミーが声をかけた。
反応は無い。
サミーは、ミーナの目の前に周り込んでもう１度声をかける。
が、次の言葉に詰まった。
「ん？あ、サミー。ねぇ・・・」
ミーナは首を傾げて、もう１度サミーを呼ぶ。
しかし、返事は無い。
「？ねぇ、サミー？サミーってば！！」
大声で呼ばれて、サミーは”え？”と声を漏らす。

サミーは思わず思考の世界へと旅立っていたようである。
「ご、ごめっ・・・。で、何？」
サミーがそう切り返すと、今まで威勢のよかったミーナが再びうなだれた。
そして、呟くように小声で1度言った。
「もう1人のわたし・・・ガイを殺したの？」
普段から、あまり涙を見せないミーナが、今はっきりと涙を流した。
勿論、皆が驚いたが、1番驚いていたのはミーナ自身だった。
彼女自身、誰かのために涙を流したのはこれが2度目であった。
そして、知らなかった。　こんなにも、彼に好意を抱いていたことを・・・。
「なくしてから気付くなんて、本当にあるんだね」

その日、皆の身体が元に戻った。

その日、仲間が1人土に還った。

その日、ミーナは初めて人前で声を出して泣いた。

夜が明けても、空が快晴でも、ミーナ達の顔は曇っていた。
「なぁんて顔してんの！もう、前に進むしかないじゃん！！」
そんな時でも、道を造るのはサミーであった。　彼女が歩き出すと、シューグとヒューゴが火花を散らしながら寄り添って進む。
そんな3人を見て、皆ゾロゾロと付いて行く。
「みんな！！！」

ミーナが、バカみたいにニカッと笑って『ごめんなさい！』と大声で言った。
ミーナを追い抜いた者も、前にいた者も足を止めて振り返る。
無理して笑っているなんてバレバレだ。
ミーナが悪い訳ではない。　皆、分かっている。
だから皆、ミーナに笑みで応えた。
「ありがとう！！！」
そう言って再び笑い、一筋の涙を流す。　深呼吸の後、ミーナの瞳に迷いは無かった。

森を暫く歩いていると、目の前に塔が現れた。
真っ黒で、馬鹿デカイ塔だ。
終わりの見えないその塔を眺めていると、どこからとも無く声が聞こえた。
『よくここまで辿り着いた』
皆、初めて聞く声だった。
一瞬、不安が過った。
魔族・・・つまり、敵が1人増えたということになるのだ。
だが、その不安は皆の心から消え去った。
「卑怯者！姿を見せなさい！！」
ミーナが先頭に立って言った。
すると魔族のものらしき声がクスクスと笑い始めた。

『私はこの塔の頂上にいる。早く来た方がいい・・・間もなく、魔王が復活するからなぁ！！』
声は大きな高笑いを響かせながら、だんだん小さくなり、聞こえなくなった。
暫くして、ミーナ達は前に踏み出した。
迷いなど無い。
魔王が復活する前に、それを止めればいいのだから。
先程の魔族の声の主も倒してやればいいのだ。
良くも悪くも、魔族は自分がいる場所も教えてくれた。
仲間が1人減ったのと同時に、彼等の心に炎が宿ったようである。
「行くわよ。頂上に・・・！」
ミーナのその言葉と同時に、皆は1歩、1歩と前に踏み出し始めた。

長い・・・・。

長い・・・・。

な～が～い～いぃ・・・・。

ずーっと、長い階段を登り続ける・・・・。
いい加減、脚が痛い。
「・・・よし。こんなもんじゃろ」
皆が足を止めて休み始めた時だった。
パオの声は、長い長い階段に響いた。
その手には、風で出来た小さな球体。　パオが力を加えると、1周り大きくなる。
次は息を吹き掛ける。

すると球体はミーナ達全員が入れるほど、とても大きなものに変わった。
「あとはコレで行こうかの。体力を温存せねばならんしな」
そう言って球体の中心に立つ。
パオは”行くぞ”と合図を出す。
皆が小さく、だが力強く頷く。
それを確かめて、球体はミーナ達を乗せて頂上に向かう。

決戦は、すぐそこまで来ていた。

ＳＴＯＲＹ１８：真実（前書き）

人は、闇を受け入れられるのか・・・？

それが、真実だったとしても・・・？

STORY18：真実

一瞬、光が見えた。
それが、頂上から漏れた光と気が付くのにそう時間はかからなかった。
目の前は暗闇。　その先に月明かりが小さく漏れている。
そして、その場に立つのは1人の影と大きな石。
遠くからでも分かるくらい大きな文字で『D』と彫られている石だ。
その隣には、月明かりに怪しく照らされる影。
見ていて嫌になる程、邪気に満ちている。
「以外と速かったな。・・・”流石”と言っておくか」
ミーナ達の視線が影に集中した。
塔の外で聴いた声だったのだ。
影は『だが・・・』と付け加える。
「少し、遅かったようだ」
影は月明かりの前に踏み出し、その姿を照らしだした。
闇色の瞳。
それに比例してか、髪も闇色である。
やはり、魔族だ。
邪気に包まれながらも平然としていられるのが何よりの証拠である。
「我が名はデス。ここに眠る魔王の息子」
デスと名乗る魔族が声を張り上げて言うと、石がガタガタと動き始めた。
「我が父よ！今こそ眠りから醒めよ！！」
デスが更に声を張り上げると、石は粉々に砕け散った。

その衝撃がミーナ達にも伝わる。
魔王の復活を喜ぶデス。
ミーナ達の試練が増えた瞬間でもあった。
「我が父よ、魔力が強く若い者の身体がここに・・・・・」
デスが差し出したのは、小さな人影。
だが、石が砕け散ったおかげで埃が舞い上がり、ミーナ達側からは何も見えなくなっていて確認は難しい。
子供くらいの大きさということだけ解る。
『これはいい器だ』
埃の中で、黒い影が人影に手を伸ばす。
そして、一瞬のうちに――――。
人影は黒い影に覆われ、邪気が溢れんばかりに・・・・いや、溢れるくらいに漂った。
『・・・ふぅ・・・。久々の肉体だ。魔力もいい具合に満ちている』
いつの間にか土埃が沈み、邪気を漂わす影は物体となってミーナ達の目の前に現れた。
身体は小さく、瞳は闇。
髪と片方の瞳は翡翠色の輝き・・・。
紛れも無く、ヴィルド兄弟の末っ子兼リーダー・エメラルドだった。
『少々、視界が悪いな・・・』
魔王はそう言うと、瞳に埋め込まれた宝石に触れた。
ミーナ達に疑問符が付く。
エメラルドは以前に倒したはず・・・と。
そんなことを考えていると、魔王の瞳から鮮血が飛び散った。
ぶしゅう・・・!!という血が吹き出す音。　その後に、ブチブチブチッ・・・、と引き契る音が続く。
魔王は翡翠色の宝石を外していたのだ。　自分の眼球と一緒に・・・。
魔王は深呼吸を1～2回すると、ミーナ達を見た。

なんの感情も出さず、ただ、『見て』いるのだ。
「へっ・・・！やってやろうじゃねぇか！！」
緊張のあまり、擦れてしまった声を出したのはルークだった。
紅い髪と瞳が、月明かりに照らされてキラキラと輝いている。
ルークの言葉に賛成した者が2人程いた。
ルークの妹のシェラと弟のシュラである。
ルークと同じ紅い瞳は、絶望等というものを感じさせなかった。
シェラの周りに燐粉が集まり、シュラの周りに炎が渦巻く。　そして、ルークの手にはシュルッと伸びた棘があった。
『蝶』『竜』『花』。
これが、この兄弟の紋章である。
それぞれの紋章が、支えあって炎を創り出す。
兄弟とは不思議なモノで・・・何かしら繋がりがあるものだ。
「名乗れよ、魔王ぉ！！」
魔王は、ふっ、とした笑みを見せると自分の名を口にした。
『――デスティニー・・・だ』

キィン！！！！！

ルークの棘が魔王に当たる。　が、素早く構えた剣に防がれる。
そのスピードに感心の声を漏らす。
だが、それはデスティニーの余裕を顕していた。
「はっ！『運命』ってか？！」
ルークは攻撃を繰り出しながら言う。
すると、デスティニーが笑った。
『そう、我が血を継ぐ者達・・・。我を求めて、貴様達はこの地へやって来た。我が子達と共にな』
「！？」
あまりの驚きに、ルークは手を止めてしまった。　その隙を逃さず、デスティニーが蹴りを披露した。

見事、ルークに命中！
ルークはそのまま後ろへ飛ばされた。
その後ろから、ルークの名を呼び心配する声が聞こえる。
ミーナ、リュウ、パオの3人の声だ。
その3人の姿を確認したデスティニーの表情は、先程の笑みよりも温かみのあるものだった。
「・・・あ、あたし」
暫くして、その異様な空気の中口を開いたのは――サミーだった。
”あたし・・・見たの・・・”
と続けて言う。
皆が耳を傾けた。
「エメラルドを倒した後・・・ミーナの瞳は――――黒かった」
「「「「！？」」」」
一瞬にして、衝撃が走った。
1番ショックを受けたのはミーナである。”瞳が黒”・・・それはミーナが人間では無いことを顕していた。
皆の身体が、表情が、恐怖をみせている。
ミーナも自分自身に恐怖を抱いた。
『信じられぬか？』
”当たり前でしょ！”と言いたいところだが、声が擦れて声にはならなかった。
『いいだろう・・・。我が真の姿を見せるとしよう――――――デス！』
デスティニーがその名を呼ぶと、”嫌だ！”と叫ぶ者がいた。
勿論、呼ばれたデス本人である。
デスは拒否した。
そして、今まで魔王にしてきたことをペラペラと喋り始めた。
魔王復活の為に、嫉妬の情を膨らませパオとリュウを引き合わせたこと。
欲望の情を膨らませ、ミーナと連合軍を引き合わせたこと。
強さを求める情を膨らませ、ムム達を引き合わせたこと。

そして、魔王を復活させる為に他の魔族（サッドやユリーク、ヴィルド兄弟等）の身体や魂を捧げたこと。
「皆、貴方の為にしたことだ！私は・・・消えたくない！！」

ごおぅ！！！！！

と音がして、デスは地面に叩き付けられた。
デスの首を馬乗りで締め上げる魔王・デスティニーの姿がそこにあった。
『お前はもう、用済みなのだ。我が血肉となり、役目を果たし終えよ』
ギリギリと締め上げられ、苦しそうにデスティニーの腕を掴む。
「ち、父・・・う、え」
薄らと涙を浮かべ、デスは魔王を『父』と呼んだ。
だが、魔王に『父』という感情は無く、デスを見下ろし更に力を込めて首を締めた。
デスは、徐々に消えていった。　『父』と慕っていた者の腕を掴んだ指先からゆっくりと。
ついに、顔だけになった時、デスティニーは冷酷な笑みを浮かべて言った。
『”父”だと？お前は我が魔力の入れ物に過ぎん。残念だったな』
「そん――――」
そんな、の1言も口に出来ずにデスは消えた。
そして、魔王は完全に復活した。
冷酷な空気、冷酷な姿、冷酷な表情を皆の前に現す。
その姿に反応する声が聞こえた。
「ち・・・父君・・・？」
「お・・・親父・・・？」
「と・・・父さん・・・？」
3人の声。

そして、3人はそれぞれの顔を見合わせた。
デスを吸収し、真の姿を見せたデスティニーを『父』と呼んだのだ。

ミーナ、リュウ、パオの3人が――――

呆然としている3人を横目に、デスティニーは自身がしてきたことを語り出した。
魔王が生まれた・・・いや、この地に存在するようになったのは１０００年以上も前のこと。　人間の神と獣の神と竜の神との間に、小さな争いが起きたのだ。
”この地で1番優れた神は？”
という、小さな小さな争いだった。
人間の神は、人間の中でも『超人』と呼ばれる存在を創った。
竜の神は、人間のような知性と器用さを持ち合わせた『竜人』と呼ばれる存在を創った。
獣の神は、人間の神や竜の神が創った存在をも超える『魔』と呼ばれる存在を創った。
それが、魔王・デスティニーである。
魔王は自身から幾つもの分身を創った。
長い時が流れて、魔族と獣族との間に『魔獣』と呼ばれる存在が誕生した。
人間も同様に、魔族との間に子を授かる者もいた。
その存在は、瞳が闇色に生まれ魔力を秘めていた。

更に時が流れ、魔族の血が薄くなり瞳の色は闇色ではなくなった。
だが、魔族の血が流れている証拠はあった。
それが、紋章である。

ずっと昔、紋章を肌に印した『勇者』と名乗る者達がデスティニーと闘いに来た。
魔族の中に裏切り者がいた為に、一瞬の隙を取られて封印されてしまったのだ。
そんなデスティニーにも、家庭はあった。
3人の人間と契りを交わし、3人の子が生まれた。
デスティニーは、己が復活するまでその3人の子の時の流れを止め、今日という日を心待ちにしていた――――。

――――その3人の子が、ミーナ、リュウ、パオなのである。
「う、嘘・・・」
ミーナが両手で口を塞ぐと、そう呟いた。
魔族を嫌っていた自分自身が、魔王の子だと知らされてショックを受けない者はいない。
声にはなっていないが、リュウとパオも相当なショックを受けているようだ。
『蝶』『竜』『鳥』
これが、ミーナ達の紋章。
それぞれが、炎を受け止められるような繋がり。
そして、兄弟には特有の同じ色の瞳である。
これが、ミーナ達が兄弟であることを顕した決定的な証拠。
ミーナが黒い瞳をしていたことを合わせると、デスティニーが本当のことを言っているとしか考えられなくなってしまった。

「てめえの話なんざ関係無い！てめえの目的はなんだ？！返答次第では、てめえを永遠に葬ってやる！！」
ショックから真っ先に立ち直ったのは、リュウ・・・・ではなく、パオ――――基、ジン・ドラングドゥ。
勇者『パオ』を受け継ぐ証でもあるその名を捨てた瞬間だった。
ジンの言葉で正気を取り戻し、ミーナとリュウも目の前のデスティニーを『父』ではなく『敵』として見つめた。
『・・・この地に、今までの種族では多過ぎるだろう？我が目的は、魔族のみの世界を創ることだ』
つまり、とデスティニーは続けて言う。
『貴様達の命も、ここまでということだ』
急に殺気を放ち、その矛先をサミー達に向ける。
蛇に睨まれた蛙のように、1歩も動けなくなるサミー。　その前に、シューグとヒューゴが剣を構えて立っていた。
ヒューゴは水で。
シューグは氷で。
「シューグ、頼む」
「ああ、君もね」
お互いに目で合図を送ると、己の武器の密度を上げた。
『水』と『氷』は相性がいい。
氷は、密度が上がれば上がる程硬くなる。　それはもう、ダイヤモンドかガッドルリコン（この世界でダイヤにも勝る硬い鉱石）くらいに。
そんなことはお構い無しに、デスティニーの手が3人に向かって伸びて来る。
両方がぶつかり合う。
その瞬間――――。

ギィンッ！！

ガツンッ！！

両方の攻撃は、途中で止まった。
４人の中心に、黒装束に身を包んだ男が膝を着いてそこにいた。
「魔王様、ご子息様達を連れてあの計画を・・・・早く！」
スウッと開かれた瞼の下に、深紅色の瞳が見えた。
ルーク達より、もっと紅く、鮮やかな色だ。
デスティニーは、その男に短く礼を言うとミーナ達３人を何処かに連れ去ってしまった。
「ミーナ！・・・邪魔しないでよ！あんた、何様のつもり！？」
「魔族様・・・だ」
サミーの言葉をさらりと返し、男はサミー達３人を突飛ばす。
己のことを『魔族』と名乗り挙げた男は、自己紹介を短めに済ませた。
「俺の名は、ダーク。他の者は俺のことを『覇王』と呼ぶ」

ＳＴＯＲＹ１８：真実（後書き）

どうか、この

感想・評価　待ってます。

俺にエネルギーを！！

ＳＴＯＲＹ１９：裏切りの瞳（前書き）

事実が全て真実とは限らない

STORY19：裏切りの瞳

自分自身を『覇王』と名乗った男、ダークは深紅の瞳を呆然とするサミー達に向けた。
それ以上は何もしない。

暫くして、ダークは漸く口を開いた。
「魔王の気配が消えたな。これなら、奴も察知出来ないはず・・・」
未だに呆然とするサミー達に、ダークは微笑み掛けた。
「あんた・・・本当に何様よ・・・？」
「”魔族様”だと言ったつもりだが？」
”じゃあ・・・”と切り出そうとしたサミーの言葉を止めて、ダークはその理由を語り出した。
1度、瞼を閉じて深呼吸をする。
そして再び開かれた瞼の下は、綺麗な紅から光の無い闇色に変わっていた。
ついでに、髪の色も変わっていた。　何処かで見たことのある色・・・。
「ああ、俺はユリークの生みの親だ。そして、この瞳は裏切り者の証」
「裏切り者・・・？じゃあ、お前まさかっ！？」
ヒョウが確信して言う。
ダークはそれを、あっさりと肯定して頷いた。
肯定した瞬間、ダークの瞳はまた深紅色へと変わる。
「先程言ってたろう？昔、裏切り者の魔族のせいで・・・って。あれは俺のことだ」
そう言うと、ダークは背を向けて空を見上げる。

ポッカリと空いた穴から、まばゆい程の月明かり。
青白く輝く月が、ダークのその名に似合わない白髪を照らしている。
時々入って来る風が、ダークの髪を揺らした。
「あの3人が生まれてからが長かった。その紋章を持つ者を揃えるのがな・・・」
ついでにダークは言った。
「全ての紋章が揃えば、今度こそ―――」

真ん丸、大きな月。
ギンガムチェックのような屋根。　いや、鳥籠か・・・。
いや、虫籠か・・・。
いやいや、監獄か・・・。
とにかく、巨大な月に照らされて、魔王と3人はそこにいた。
床には巨大な魔方陣。
今見えている月よりは小さいが、少なくとも半径4メイルはある。
魔王はその中心に立ち、月に向かって手を伸ばす。
『我が名はデスティニー。彼の者は『魔王』と呼ぶ。・・・さあ、月よ！我が力の源となれ！！』
デスティニーの言葉に反応してか、月の光が少し赤くなる。
その赤くなった月の光が魔方陣に当たり、文字が赤く変わる。
その文字はデスティニーに印される。　見たことも無い、理解不能な文字。
しかし、それが不吉なものだと感じたのは確かである。
『さあ、我が子等にも・・・』

デスティニーはミーナ達に手を伸ばす。
月の光がミーナ達に向かって来る。
だが、その光はミーナの前で弾かれた。
デスティニーは、驚きもせずにまるで最初から分かっていたかのように、口の端を吊り上げた。
「悪いがそれは断る。今は、この俺様が住んでるんだからな」
金色の瞳の男。
ミーナもリュウもジンも知っている存在。
ミーナの中に存在していた者。
そう、ジェイドである。
だが、今回の現れ方は少し違った。
何故なら、ジェイドはミーナの目の前にいたからである。
デスティニーは、漸く出て来たか、と笑みを漏らす。
ジェイドも口の端を吊り上げている。
ふふふと笑う2人に圧倒されるミーナ達3人。
「久々だな・・・さあ！今こそ、俺様の分身を返しやがれ！！」
『嫌・・・だと言ったら？』
「力尽くでも取り返す！！」
ジェイドは力強く言うと、デスティニーめがけて突撃して行った。

金属音が連発して辺りに響く。
あれから暫く経っているというのに、ジェイドとデスティニーは疲れた様子も無く、黙々と攻防戦を続けている。
傍からみれば、演武を披露しているかのように美しい。
だが、呪文を1つ唱えただけで辺りに影響を与える程、威力は半端ではない。
力はほぼ互角。
ミーナ達も参戦しようとするのだが、ジェイドとデスティニーに

止められてしまった。
それ以前に、近付けない。
「俺様に付いて来れるか・・・（汗）。やはり、魔王であるだけはあるな」
手を休めず、魔王に向かって言う。
デスティニーも嘲笑って口を開いた。
『当たり前だ。我が内には、貴様もいるのだからな』
「そうだった・・・な！！」
最後の言葉と同時に、デスティニーを凪ぎ払うように腕を振る。
金属が金属を引っ掻いているような音。
どちらも1歩も引かず、押し合っている。
いや、少しばかりかジェイドの方が押している。
一瞬、勝機が見えた。
だが、その一瞬がジェイドに隙を生じさせた。
「ぐあっ！？」
勿論、デスティニーがそれを見逃すはずが無く、ジェイドの身体は引き裂かれた。
デスティニーは、今度こそ笑った。
本気で、大声で笑った。
引き裂かれた身体からは、大量の血が――――
『！？・・・偽物か！！』
――――出なかった。
いや、血ではなく、大量の燐粉がジェイドの姿から崩れた。
デスティニーの後方に、鈍い音と衝撃が加わる。
微動だにしないデスティニー。　すぐにそいつも引き裂く。
だが、それもやはり、燐粉の塊。
次々に現れるジェイドの姿に混乱し、デスティニーは悔しそうに大声を上げた。
怒りがデスティニーを支配する。
「やべっ、やりすぎたか・・・？」

そう言って、本物らしきジェイドが姿を見せた。
デスティニーは、すかさずソレに手を上げた。
ボスッ！と、先程より硬い音。　だが、物に当たった音としては柔らかすぎる。
『またか！』
手に付いた燐粉を払い除ける。
だが、駄目だった。
燐粉がデスティニーの手を束縛する。
「ま、これでいいだろ。さあ、返してもらうぜ？」
今度こそ本物のジェイドが現れる。　そして、デスティニーの胸元に触れ、手を入れてゆく。
デスティニーは、抵抗する。　が、抵抗しきれなかった。
デスティニーの力の無い声と同時に、ズルズルと人のような形の塊が引きずり出される。
やがて、透明だったソレは、徐々に色を取り戻し始めた。
完全に戻ったその姿は、ジェイドにそっくりだった。
「漸く・・・俺様は完全に戻る」
ジェイドは完全に戻りながら言う。
そして、ミーナに声をかけた。
「女！剱を渡せ。ありゃ、俺様の物だ」
「剱・・・？あの、紋章が彫ってある？」
「そう、それだ」
あの、魔族によって破壊された街にあった剱。
ミーナ以外、重くて持ち上げることも出来なかった剱。
その剱をミーナから受け取り、ジェイドは軽々と振り回した。
ジェイドに笑みが零れた。
少年のように、好奇心、冒険心の強い笑顔だ。
「俺様はついにお前を超えた。俺様の『闇』が、漸く完全になった！魔王、お前の負けだ！！」
ジェイドが勝ち誇り言う。

だが、先程まで魔王の中にいたもう1人のジェイドが怒鳴った。
その声は、ミーナ達にも聞こえるものだった。
デスティニーは、未だ俯いたままである。
片方のジェイドは、怒っていた。　今まで取り込んでいた魔王にではなく、今、取り込もうとしている本人にだ。
「――――!?!?!?・・・しまった!!!」
ジェイドが身構えた。
だが、次の瞬間には既に倒れていた。

グキャリ!

鈍い骨の折れる音が漸く聞こえた。
そこにいたのは、変わり果てた姿のジェイドと、目の色が変わり興奮状態の血塗れのデスティニーだった。
ミーナ達は、今までに無い恐怖に身を震わせた。
姿が変わり、雰囲気がガラリと変わったデスティニーは最早、『魔王』とは呼べない。
今までは、強い力の人型があったからよかった。
だが今、それが無い。
昔、獣の神が創った『魔王』という存在は、この世に生きる獣を寄せ集めた結果だ。
人は、それを合成生物、または『キメラ』と呼ぶ。
自我を失ったデスティニーは鋭い爪を振り上げる。
狙いは・・・ミーナ!

「いぃやあああぁぁ!!!!!」

その声と同時に、魔王の苦痛の声が辺りに響いた。

ＳＴＯＲＹ２０：還って来た彼（前書き）

紅い月が照らすのは――――痛みに叫ぶ魔王と、朱色の鱗を輝かせる男・・・。

ＳＴＯＲＹ２０：還って来た彼

ミーナの悲鳴。
その直後に、デスティニーの悲鳴。

一瞬の出来事に、誰も何も言い出せなかった。
１つ分かっていることは、デスティニーが苦しんでいるということ。

『キメラ』化したデスティニーに、挑発するような言葉を口にする男がいた。
黒い瞳に、背中に生えた大きな翼。
鋭い爪に、硬い皮膚。
そして、見覚えのある声と顔。
少し前に土へ還ったはずの男。
「待たせたな、ジェイド。これでチャラだ」
その男は、ジェイドを抱え起こして言う。
「出待ちが長いんだよテメェは・・・！」
そう言われて、男は笑ったように見えた。
ミーナ達は己の目を疑った。
涙して別れたはずの存在。
竜人族の男・ガイがそこにいたのだ。
「死んで・・・なかった・・・のか？」
リュウが漸く口を開いた。
ジンも、力が抜けたように腰を着けた。
「悪ぃ。ジェイドと一芝居うってたんだ」

（一言も”死んだ”とか書いてませんしねぇ／ｂｙ作者）

ガイはジェイドを回復させ、デスティニーに向かって構えた。
そして、2人から黒いオーラが出る。
普段は見えないはずのオーラ。　だが、強く念じれば、誰でも出せるものなのだ。
それが見えるということは、それだけ強く念じていることになる。
デスティニーの瞳が、ガイを睨み付けた。
「魔王！！」
下の方から声が聞こえた。
それに続いて、大勢の足音も聞こえる。
先に姿を見せたのは、ダーク。　その後ろにサミー達が現れた。

「魔王！今度こそ、貴方を消滅させてみせる！！」

ミーナ達の前に現れた魔族は、そう言って呪文を唱えた。
左側の首筋に見える、闇色の『火』の紋章。
両手に炎を纏わせ、それを少しずつ大きな球体へと変化させる。
それをデスティニーに放ち、ダメージを与えてみる。
だが、ダメージは無いようだ。
微動だにしていないのである。
「流石、魔王。『闇』の力の俺では適わないか・・・」
デスティニーは低く唸る。
適わないと分かりながらも、ダークは炎球体（ファイア・ボール）を唱え続けた。
「魔王！下手な芝居は辞めようぜ！野生化しても、理性は残ってんだろ？」
ガイはそう言って、デスティニーに殴りかかった。
低く唸るのを辞め、デスティニーは３６０度回旋し、その時に発生した風でガイの攻撃を防いだ。

風に飛ばされたガイだったが、すぐに立て直し再び臨戦体勢で構えた。
『そうするとしよう。いい加減、疲れていた所だ』
ガイの殺気が強くなったのと同時に、デスティニーが言った。
ダークも気付いていた。
他の皆も、多少ながら気が付いていた。
「ウィンディ・ボール・・・・」
「ファイア・ボール・・・・」
「パウダー・ソウル・・・・」
と、ガイと睨み合うデスティニーの後方から、小さい声で3つの呪文が同時に聞こえた。
「「「いっけぇぇぇ!!!」」」
3人は、身体を支え合って巨大な炎を作り、父であるデスティニーに投げた。
ジンの風で、リュウの炎が強くなり、ミーナの燐粉で、その炎を更に燃やす。
1人では、絶対に作り出せない炎がデスティニーの皮膚を焦がした。
皮膚の1部分を焦がしただけだった・・・。
『その顔は、母親によく似ている・・・。だが、我が子等よ、お前達は我に背くのだな?』
「「「当たり前だ（よ）！」」」
いくら父親だからといって、人を動物を世界を崩そうとしている存在を許そうとは思えない。
だから断った。
だが、デスティニーには理解出来なかった。　いや、したくなかった。
『何故だ！この世を我が物に出来るというのに！』
デスティニーは声を張り上げた。
ミーナはそれに静かに答えた。

”今のままがいい”と。
デスティニーは頭を抱え、同時に耳を塞ぐ。
我が子の口からは聞きたくない台詞だった。
以前の我が子であれば言うはずのない台詞・・・。
絶望し、孤独に育て、いずれ親子４人の世界を創り出すはずだった。
だが、ミーナ達は出逢った。
他人（ひと）と。
友人（とも）と。
仲間（きずな）と。
愛しく思える異性と。
そして、自分自身と。

魔王は、混乱している。
唸って、唸って、唸って、漸く我を取り戻した。
『・・・いいだろう。貴様達に、”死”をプレゼントしてやろう』
そう言って、デスティニーは口の端を吊り上げる。
だが、ミーナ達に勝機が無い訳ではない。
どちらかと言えば、デスティニーの方が不利だ。
なんせ、デスティニーは１人。
ミーナ達は１６人。
シェラの中にいるユーリを合わせれば１７人である。
そして、デスティニーとミーナ達の戦いが始まった。

ＳＴＯＲＹ２０：還って来た彼（後書き）

感想、何でもいいです！　意見を聞かせて下さい！！

お待ちしています。

STORY21：『魔王』（前書き）

『魔王』　　それは、憎き者

『魔王』　　それは、憎まれる存在

STORY21：『魔王』

1人で構えるデスティニーを睨み続けて、もう、暫く時間が過ぎた。
緊張した空気が、皆の感覚を狂わせたかのように漂う。
『貴様達に、有利な戦いで勝負しようではないか。それなら、負けても悔いは残るまい・・・？』
皆が感覚を取り戻そうとしている中、デスティニーだけは平然として、しかも、笑みを見せながら言った。
そして、デスティニーには不利な戦いを求めた。
「二言は無いわね？」
漸く感覚を取り戻したミーナが言った。
それを見たデスティニーは”ほぅ”と感心する。
ミーナの後方には、まだ取り戻しきれていない者も多かったからである。
本人には悪いが、魔王の子だけのことはある。
「じゃあ、早速だけど、わたし達に休息を頂戴。」
ミーナの提案に、デスティニーはただ頷いた。
普段ならすぐにツッコミを入れるのだが、確かにミーナの言う通り、皆疲れている。
皆は、普段よりも冷静なミーナの意見に賛成した。

完全に回復して、今の雰囲気に身体を慣れさせるには、思ったよ

りも時間が掛かった。
あれから紅い月が3回昇った。
欠けていた月が徐々に満ちていく。
日がある間、デスティニーは眠っている。
その間に、ミーナ達は作戦を考える。

どうすれば・・・・！

勝ちたい・・・・！！

そして、4回目の月が昇ってミーナ達は決めた。

「魔王」
『覇王か・・・・』
デスティニーに、このことを告げに行ったのはダークだった。
それに気付いていたらしく、デスティニーは背を向けたまま、ダークの二つ名を呼んだ。
ダークは冷静なまま、ミーナからの伝言。
”明日、決着をつける”・・・・と。
それだけ告げて、魔王の側を離れて行った。

そして、朝が来た――――

魔王が目覚めた夕刻頃、ミーナ達は万全だった。
この空間、雰囲気にも慣れた。

体力も回復した。
そんなミーナ達の中から、最初に前に出たのはヒョウ、シューグ、ヒューゴの3人。
皆、『水』や『氷』の紋章の持ち主である。
「・・・ＲＯＵＮＤ１（ワン）」
「まずは俺達が相手になるぜ」
「参る！！」
と、3人はそれぞれにデスティニーに言った。
まずは、ヒューゴの呪文から始まった。
「ウォーター・ウェーブ！」
その呪文を唱えると、発生した水達がたちまち辺りを水浸しにした。
小さい波が徐々に大きくなる。
大きくなった波は、デスティニーを襲った。
「クール・ポイント」
続いてヒョウが呪文を繰り出すが、デスティニーは簡単に躱した。
襲って来る波も避けようと身体を翻す。
案の定、簡単に躱される。
「スパイダー・ブリザード！！」
シューグが蜘蛛の巣のような氷柱を辺りに張り巡らせる。
獣のような瞬発力は、それにも反応してみせた。
飛び上がろうと脚に力を込め、態勢を整える。
「ジョイント！」
ヒョウがそう唱えると、デスティニーは動けなくなった。
ヒョウが放っていたのは、時間差で発動するものだったのである。
水浸しになった床に、氷柱が這う。
「スパイダー・ブリザード」

ヒョウが、また呪文を放つ。
２つの氷柱は、真っ直ぐデスティニーに向かって行った。
”スパイダー・ブリザード”は元々、左右に現れる呪文である。
ヒョウはそれを上下に放ってみせた。
氷柱は徐々に小さくなり、デスティニーを包み込む。
氷の檻に閉じ込められたデスティニーに向かって、３人は同時に合体呪文を唱えた。
「アイス・・・」
「ニードル・・・」
「アローーー！！！」
その呪文は、無数の氷針を創り、まさに矢の如き勢いで標的へ向かう。
ズドドド、と轟音をあげているが、３人は手応えを感じてはいなかった。
『素晴らしい連携だが、残念だったな』
朱い夕日が、３人と１体を照らしている。
デスティニーは薄笑いを浮かべて言った。
どことなく、不気味に見える。
デスティニーは、退け、と一言だけ言って呪文を唱えずにただ、腕を凪ぎ払った。
その風圧のみで、３人の身体は背中側の壁まで飛んで行ってしまった。
壁に叩きつけられた後、すぐ重力に負けて下に落ちた。
圧倒的な力の差を見せ付けられた。
３人は動かない。
死んだ訳ではなさそうだが、すぐには動きそうもない。
その一部始終を見ていたというのに、ミーナ達は諦めていなかったようだ。
「オラオラ！ＲＯＵＮＤ２だぜぇ！！」
デスティニーが一息着く前に、ルークの一撃が極った。

手応えはあるが、軽い音・・・。
ルークの舌打ちと共に、シュラが蒼い炎を打ち出す。
シェラの放つ燐粉で、更に威力が増す。
結果、凄まじい炎の渦がデスティニーを飲み込んだ。
『ぐっ・・・』
デスティニーの口から、思わず苦情の声が漏れる。
3人はそれを見逃さなかった。
次々と呪文を唱え、轟音と共にデスティニーを襲った。
『ぐぐ・・・』
デスティニーは身体を丸めて、防御の態勢を作る。
そこに、オージェットとミレイの最強呪文が加わる。
それは、デスティニーを追い込んだように見えた。
だが・・・、デスティニーは身を震わせていとも簡単に反ね返してしまった。
休み無しに呪文を唱え続けていたためか、5人は疲労を全身で感じ取り、暫くは動けない状態となっていた。
『ふぅ。今のは少し危なかった・・・。さぁ、ＲＯＵＮＤ３を始めようか？』
多少ダメージはあるが、疲労の色を見せていないデスティニーに皆引いた。
既に8人がノックアウトされている。
「しゃ～ねぇな～。ミーナ、ＲＯＵＮＤ３は俺様が行くぜ？」
金色の瞳の魔族は、頭を掻きながら言った。
ミーナは黙って、首を縦に振って答えた。
「・・・と、まぁそうゆーことだ。今までの礼をさせてもらうぞ？」
全身に金色のオーラを放ち、ジェイドは今までに無い力を溢れさせている。
その場の雰囲気を変えてしまう程、威圧感で皆を包み込んだ。
デスティニーも感じ取った様子で、今までに無くぐっと構え待った。

「ポイズン」
ジェイドは呪文を唱え、燐粉を漂わせる。
もう１つ呪文を唱えると、燐粉は長い槍となって現れた。
『魔王』と『転生者』の闘いが始まった。

さすがは魔族。
先程の８人よりも感じ取れる力の強さ。
２人の攻防は、茜色だった空を暗くして行った。
紅く輝く月が登った。
その瞬間、ジェイドが押され始めた。
辺りは紅い月光に照らされ、デスティニーの身体に紅い文字が刻まれた。
文字が刻まれる度に、デスティニーの力は増し、ジェイドを傷付けた。
傷付けられたジェイドは、眉間にシワを寄せて次第に重くなる身体を動かす。
「月が・・・！くそっ！！」
デスティニーがニヤリと笑った。
月が昇り、魔王としての力が増したのである。
しかも、今日は満月。
魔王の力が最も優れる月に１度の日、そして、デスティニーが存在を許された日。
ミーナ達の母達に出逢った日。
つまり、デスティニーにとって、忘れようのない大切な日なのである。
今や、キメラとなったデスティニーに感情があるならば、涙を流していたであろう。
『うおおぉぉっ！！』
「ぐぁ！！」
デスティニーは、ジェイドを投げ捨ててミーナ達に立ちふさがっ

た。
『残りはお前達だけか・・・』
そう言って呪文を唱えようとするデスティニーの動きが止まった。
脚部に違和感を感じたのだ。
そこには、投げ捨てたはずのジェイドの姿。
まだ、ヤリ足りないと笑っていた。
『”転生者”如きが・・・我に適うとでも？』
「思ってねぇさ。1人ならな！！！」
デスティニーの言葉を遮り、ジェイドが叫ぶように声を出すと、倒れていたシェラの身体が輝きだした。
蛹が羽化するように、シェラの身体から銀髪の魔族・・・ユーリが現れた。
少々、機嫌が悪いようだ。
長いことほったらかしていたからだろうか？
「久しぶりだな、魔王。貴様に殺されかけ、転生者としての力に目醒めてから５００年・・・。今日はその決着を付けてやる！！」
突然現れたユーリの姿に、一瞬怯むデスティニー。
おそらく、ユーリの言葉通りなら”殺したはず・・・”とでも思っているのであろう。
その隙を、ユーリとジェイドは見逃さなかった。
「「ポイズン・ミスト」」
２人が同時に唱える。
すると、霧状の何かが辺りに広まった。
その『何か』とは、身体を蝕むモノ・・・つまり『毒』である。
野生的勘で、霧を吸い込まないように低い姿勢を保つ。
そんなデスティニーの姿を見て、ジェイドは笑い声をあげた。
「無駄無駄無駄ぁ！お前の身体には、既に毒が回り始めている！！」
「貴様はもう、まともには動けまい！！」
『ふ、残念だが・・・我はその程度の毒にはやられはせ――――っ！？』

まだまだ余裕、と仁王立ちしていたデスティニーの膝が地面に着いた。
２人の転生者が、同時に倒れた。
何が起きたのか、ミーナ達には分からなかった。
ただ１人、分かっている者がいる。　ミーナはその人物、ダークに眼で問う。
ダークは静かに答えた。
「魔王が受けた傷は、魔族にもダメージが与えられる。裏切り者は別としてな」
ダークを見つめていた碧の瞳が、地面に倒れた２人を向く。
「じゃあ、今までの攻撃の分も？」
「ああ、多少は喰らっていただろうな」
そんな話をしている間にも、デスティニー達は再び攻防を繰り返す。
デスティニーに痛恨の一撃を喰らわす度、ジェイドとユーリの身体は地面に着いた。
”どうせ２人は止めないだろう”
そう思ったミーナは、自ら止めようとはしなかった。
両者がボロボロになった頃、漸く２人の動きが止まった。
倒れた２人の顔は、子悪魔のような笑みが浮かんでいた。

ＳＴＯＲＹ２１：『魔王』（後書き）

感想・評価お待ちしております（・∀・）ノ

STORY22：それぞれの空へ（前書き）

この小説はこれで最終回となります。　短いようで長い間、御覧になった皆様ありがとうございました。
少し短いものに仕上がってしまったことを、今、謝っておきます。
スミマセン…

STORY22：それぞれの空へ

『魔王』との闘いが始まって、遂に、紅い満月が昇り伐った。
１７人いたミーナの仲間達は、既に半分の人数・・・いや、それ以下の人数となっていた。
デスティニーは、真っ直ぐミーナ達に向かって歩いて来る。
ズシッズシッ、としっかりしたような足取り。　しかし、時折ふらつく姿も見られる。
ジェイド＆ユーリのペアとの闘いのダメージが大きいようだ。
デスティニーはミーナ達の目の前に立ち、『死』の呪文を唱える。
『”サヨナラ”だ・・・我が子達よ』
デスティニーがそう言って、呪文を放つ。
ミーナ達の身体は、塵のように散っていく。
徐々に消える身体をまじまじと見つめる。　その姿を見て、ミーナ達の表情は絶望――――――いや、歓喜に満ち溢れていた。
デスティニーの思考に疑問符が浮かび、結論に至った。
その瞬間、デスティニーは青ざめた。
散り崩れていくミーナ達の身体は、前に見たことのあるものだった。
『！？』
デスティニーはその場から後退り、警戒するように低く唸った。
だが、今頃気が付いたところでもう遅い。
ミーナ達の塵は、デスティニーに絡み付いた。
「かかったＮａ！」
「あんたの負けじゃん！」
消える身体の後方からやって来たのは、闘っていたはずの１７人。
傷１つ見当たらず、疲れも無いようだ。
更に、その後方からミーナもやって来る。

デスティニーは負けを悟ったのか、唸るのを止め、ドサッと音をたてて座り込んだ。
『この勝負、我々の負けだ・・・。我が血を受け継ぐ者達よ、早く我々を楽にしてくれ』
デスティニーは疲れきった笑みを見せ、肩を落とした。
その瞬間、デスティニーの姿が元に・・・人の姿に戻った。
デスティニー本人は気付いていない。
もう、閉じた瞼を開く力も残っていないのである。
「・・・『魔王』。貴方の計画は成功ですか？」
『その声は『覇王』か・・・？・・・あぁ、成功だとも。漸く、我が妻達の下へ逝けるのだからな』
ダークの声に反応して、デスティニーは優しい表情で言う。
あの時言っていた『計画』とは、デスティニーの『死』を意味していたのである。
「さぁ、皆、最強呪文を唱えて」
ミーナが言った。
まず最初に唱えたのは、ダークだった。

【汚れなき『魔』を受け継ぎし、我が名はダーク。『闇』の力を唱える者。我が手に宿りし炎よ、邪気なる者に滅びを与えん】

ムム

【我が血、我が肉、我が手足、内なる我が力に呼び掛けろ。『風』よ！轟け！】

ゴッド

【大神ゼアナ！我が血肉を捧げん。鋼をも貫く力を今、我に！】

ルーク

【草花よ、我が声を聞け。我が手足となり、愚かなる者へ審判を下

せ！】

サミー

【月、雲、空に浮かぶ星々達。憐れな我を照らし、愚かなる者を討つ力を！】

ジン

【闇をも照らす我が力。不死の神鳥・フェニックス。我が身体に宿り、闇を討ち滅ぼさん】

ヒョウ・シューグ

【大地をも凍らすその力。我等に分け与えたまえ。『闇』を閉じ込め、いざ砕かん】

ヒューゴ・ミレイ・オージェット

【邪気を討ち消し聖なる流水。その如く、我等に力を流したもう】

リュウ・シュラ・ガイ

【偉大なる竜の神・ガイリュトー。我等にその魂を移せ】

シェラ

【花に群がる蝶、我が内なる力に群がりなさい。我が『闇』がその力を強くするでしょう】

ミーナ

【我が内に群がりし蝶。我が『闇』が力を注ぐ。汝の力も我に捧げよ！】

ミーナが最後に言うと、皆の姿が一瞬にして一変した。

それぞれが、それぞれの紋章の力を引き出し、その姿を借りてそ

の場に立っているのだ。
簡単に言えば、ミーナは蝶の姿、リュウは竜の姿、ジンはフェニックスの姿になり、それぞれのオーラを放っている。
「火と水、太陽と月。モノには対なるモノがある。『闇』とて同じ・・・」
ダークは顔を伏せて言った。
ミーナが呪文を叫ぶ。
「我は汝、汝は我。『闇』と対なる者なり。我は請う！悪しき『闇』に、永遠の眠りを！」

『『『『ライトニング・シャイン・バースト』』』』

魔王の身体が、その呪文により、『光』に包まれた。
呪文の威力は、塔の半分を吹っ飛ばし曇った空に光を与えた。

雲1つ見当たらない青空。
ミーナ達の背後には、崩れた塔の跡。
ここで、ミーナはたった1人の父親を”永遠”という『光』の中に閉じ込めた。
もう、2度と、目を醒ますことは無いだろう。

初めは、些細なことから始まった旅だった。
自分の村から出なければ、こんな悲しい気持ちにはならなかっただろう。
こんな虚しい気持ちにはならなかっただろう。
こんなにも、大切に思える戦友(なかま)には会えなかっただろう。
ミーナは忘れない。
彼等とて、忘れはしない。

さあ、別れが近付いて来たようだ。

「で？これから、どーすんＤａ？」
１人、荷物をまとめながら、ゴッドが言った。
それぞれが、それぞれの”これから”について語り始めた。
ミレイ、オージェット、ムムは自分の故郷へ帰るらしい。
ゴッドは、自分磨きの旅に。
ルークとシュラは、連合軍の為の道場を拓くようだ。
「俺達、結婚することにしたんだ」
「はい。私、リュウさんに付いて行きます！」
そう、幸せそうに２人は言った。
「あたしはこの２人と一緒に旅するよ」
サミーは、そう言ってシューグとヒューゴの肩に腕を回した。
「ワシは、この名のまま、軍に戻るとするかの」
ご自慢の前髪を、クルリンッと回してジンが言う。
「わたしは、村に帰る。ガイ、あんた行くとこ無いんでしょ？村おこし手伝ってくんない？」
「そりゃ助かる。お邪魔するぜ」
それぞれの道を見据えて、皆は塔を振り返る。
そこには深紅の瞳から涙を流すダークの姿があった。
「あんたは・・・どうするつもり？」
声色１つ変えず、ミーナは普段通りに尋ねた。

「ここにいる。離れる気は無い」
ダークは普段通り、冷静な言葉で返事をする。
ミーナは、少し微笑んで”そぅ”と呟いた。

皆は荷物をまとめ、それぞれの方角へ――――いや、それぞれの空へと足を踏み出した。
皆は口々に言う。

『またな』

――――と。

fin

STORY22：それぞれの空へ（後書き）

いやぁ、終わったなぁ。　なんか後ろの方でミーナの罵声が聞こえるが・・・・　無視しよう

まぁ、色々なこともありましたが・・・長い間、暖かい目で見守って下さりありがとうございましたm（__）m　ではでは、また、近い内に別のジャンルでお会いしましょう

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6572b/

それぞれの空へ

2010年12月22日14時16分発行